

# 半七捕物帳

白蝶怪

岡本綺堂

青空文庫



文化九年——申年さるの正月十八日の夜である。その夜も四ツ半（午後十一時）を過ぎた頃に、ふたりの娘が江戸小石川の目白不動堂を右に見て、目白坂から関口駒井町ちようの方角へ足早にさしかかった。

駒井町をゆき抜ければ、音羽おとわの大通りへ出る。その七丁目と八丁目の裏手には江戸城の御おまかない賄組の組屋敷がある。かれらは身分こそ低いが、みな相当に内福であつたらしい。今ここへ来かかった二人の娘は、その賄組の瓜うりゅう生長八の娘お北と、黒沼伝兵衛の娘お勝で、いずれも明けて十八の同い年である。

今夜は関口台町の鈴木という屋敷に歌留多かるたの会があつたので、二人は宵からそこへ招かれて行つた。いつの世にも歌留多には夜の更ふけるのが習いで、男たちはまだ容易にやめそうもなかつたが、若い女たちは目白不動の鐘が四ツを撞つくのを合図に帰り支度に取りかかつて、その屋敷で手ごしらえの五目鮎ごもくずしの馳走になつて、今や帰つて来たのである。屋敷を出る時には、ほかにも四、五人の女連れがあつたのであるが、途中でだんだんに別れて

しまつて、駒井町へ来る頃には、お北とお勝の二人になつた。

夜更けではあるが、ふだんから歩き馴れている路である。自分たちの組屋敷まではもう二、三丁に過ぎないので、ふたりは別に不安を感じることも無しに、片手に提ちようちん灯あかりを持ち、片袖は胸にあてて、少し俯うつむ向むいて、足を早めて来た。

坂を降りると、右側は二、三軒の屋敷と町屋で、そのあいだには寺もある。左側は殆どみな寺である。屋敷は勿論、町屋も四ツ過ぎには表の戸を閉めているので、寺町ともいべき此の大通りは取り分けて寂しかった。春とは云つても正月なかばの暗い夜で、雪でも降り出しそうな寒い風がひゅうひゅう吹く。二人はいよいよ俯向き勝ちに急いで来ると、お北は何を見たか、俄かに立ち停まつた。

「あら、なんでしよう」

お勝も提灯をあげて透かして見ると、ふたりの行くさきの一つの白い影が舞っているのである。更によく見ると、それは白い蝶である。普通に見る物よりやや大きいが、たしかに蝶に相違なかつた。蝶は白い翅はねをひるがえして、寒い風のなかを低く舞つて行くのであつた。二人は顔を見あわせた。

「蝶々でしょう」と、お勝はささやいた。

「それだからおかしいと思うの」と、お北も小声で云った。「今頃どうして蝶々が飛んでいるのでしょうか」

時は正月、殊にこの暗い夜ふけに蝶の白い形を見たのであるから、娘たちが怪しむのも無理はなかった。二人はそのまま無言で蝶のゆくえを見つめてみると、蝶は寒い風に圧されるためか、余り高くは飛ばなかった。むしろ地面を掠めるように低く舞いながら、往来のまん中から左へ左へ迷って行つて左側の或る寺の垣に近寄つた。それは杉の低い生垣で、往来からも墓場はよく見えるばかりか、野良犬などが毎日くぐり込むので、生垣のあたりは疎らまばになっていた。蝶はその生垣の隙間すきまから流れ込んで、墓場の暗い方へ影をかくした。

それを不思議そうに見送つてみると、二人のうしろから草履の音がきこえて、五十ばかりの男が提灯をさげて来た。彼は通り過ぎようとして見返つた。

「御組屋敷のお嬢さん達じゃあございませんか」

声をかけられて、二人も見かえると、男は音羽の市川屋という水引屋みずひきやの職人であった。ここらは江戸城に勤めている音羽という奥女中の拝領地で、音羽の地名はそれから起こつたのであると云う。その関係から昔は江戸城の大奥で用いる紙や元結もつとや水引のたぐいは、

この音羽の町でもつばら作られたと云い伝えられ、明治以後までここらには紙屋や水引屋が多かった。この男もその水引屋の職人で、源蔵という男である。多年近所に住んでいるので、お北もお勝も子供のときから彼を識っていた。

「今時分どこからお帰ります」と、源蔵はかさねて訊いた。

「鈴木さんへ歌留多を取りに行つて……」と、お北は答えた。

「ああ、そうでしたか」と、源蔵はうなずいた。「そうして、ここで何か御覧になったんですか」

「白い蝶々が飛んでいるので……」

「白い蝶々……。ご覧になりましたか」

「こんな寒い晩にどうして蝶々が飛んでいるのでしょうか」と、お勝が訊いた。

「わたくしももう三度見ましたが……」と、源蔵も不思議そうに云つた。「まったく不思議ですよ。去年の暮頃から、時々に見た者があると云いますがね。この寒い時節に蝶々が生きている筈がありませんや、おまけに暗い晩に限つて飛ぶというのは、どうもおかしいんですよ」

武家の子とはいいいながら、若い娘たちはなんとなく薄気味悪くなって、夜風がひとしお

身にしみるように感じられた。

「蝶々はどっちの方へ飛んで行きました」と、源蔵はまた訊いた。

「お寺のなかへ……」

「ふうむ」と、源蔵は窺うように墓地の方を覗いたが、そこには何かの枯れ葉が風にそよぐ音ばかりで、新しい墓も古い墓も闇の底に鎮まり返っていた。

提灯の火が又ひとつあらわれた。拍子木ひょうしぎの音もきこえた。火の番の藤助という男がここへ廻つて来たのである。三人がここに立ち停まっているのを見て、藤助も近寄つて来た。

「なにか落とし物でもしなすつたかね」

彼も三人を識っているのである。源蔵から白い蝶の話が聞かされて、藤助も眉をよせた。

「その蝶々はわたしも時々に見るがな。なんだか気味がよくない。今夜はこの寺の墓場へ飛び込んだかね」

「誰かの魂たましいが蝶々になつて、墓の中から抜け出して来るんじゃないかね」と、源蔵は云つた。

「なに、墓から出るんじゃない、ほかから飛んで来るんだよ。墓場へはいるのは今夜が初めてらしい」と、藤助は云つた。

「だが、蝶々が何処から飛んで来て、どこへ行ってしまうか、誰も見とどけた者は無い。第一、あの蝶々はどうも本物ではないらしいよ」

「生きているんじゃないのか」

「飛んでいるところを見ると、生きているようにも思われるが……。わたしの考えでは、あの蝶々は紙でこしらえてあるらしいね。どうも本物とは思われないよ」

聴いている三人は又もや顔を見あわせた。

「わたしもそこまでは気が付かなかつたが……」と、源蔵はいよいよ不思議そうに云った。「紙で拵こしらえてあるのかな。だって、あの蝶々売が売りに来るのとは、違うようだぜ」

「蝶々売が売りに来るのは、子供の玩具おもちゃだ。勿論、あんな安っぽい物じゃあないが、どうも生きている蝶々とは思われない。白い紙か……それとも白い絹のような物か……どっちにしても、拵え物らしいよ。だが、その拵え物がどうして生きてるように飛んで歩くのか、それが判らない。なにしろ不思議だ。あんな物は見たくない。あんなものを見ると、なにか悪いことがあるように思われるからね。といって、わたしは商売だから、毎晩こうして廻っているうちに、忌いやでも時々見ることもある。気のせいか、あの蝶々をみた明くる日は、なんだか心持が悪くって……」



こんな話を聴かされて、三人はますます肌寒くなつて来た。お勝はお北の袂たもとをそつと曳いた。

「もう行きましようよ」

「ええ、行きましよう」と、お北もすぐ同意した。

「そうだ。だんだんに夜が更ふけて来る。お嬢さんたちはお屋敷の前まで送つてあげましようよ」と、源蔵が云つた。

藤助に別れて、三人はまた足早にあるき出したが、音羽の通りへ出るまでに、蝶は再びその白い影をみせなかつた。娘たちの組屋敷は音羽七丁目の裏手にあるので、源蔵はそこまで送りとどけて帰つた。

お北の父の瓜生長八は、城中へ夜詰よづめの番にあたつていたので、その夜は自宅にいなかつた。瓜生の一家は長八と、妻のお由と、長女のお北と、次女のお年と、長男の長三郎と、下女のお秋の六人暮らして、男の奉公人は使っていない。長三郎は十五歳で、お年は十三歳である。お北の帰りが少し遅いので、長三郎を迎えにやろうかと云つてるところへ、お北は隣家のお勝と一緒に帰つて来た。水引屋の職人に送つて貰つたと云うのである。

「唯今……。どうも遅くなりました」

茶の間へ来て、母のまえに手をついた娘の顔は蒼かった。

「お前、どうしたのかえ」と、母のお由は怪しむように訊いた。

「いいえ、別に……」

「顔の色が悪いよ」

「そうですか」

白い蝶が若い娘たちを気味悪がらせたには相違なかったが、お北自身は顔の色を変えるほどに脅かされてもいなかった。彼女は却つて母に怪しまれたのを怪しむくらいであった。しかし、まんざら覚えのないわけでも無いので、白い蝶の一件を母や妹に打ち明けようと思いつながら、なぜかそれを口に出すのを憚るような心持になって、お北は結局黙っていた。「この春は風邪が流行ると云うから、気をお付けなさいよ」と、なんにも知らない母は云った。

夜も更けているので、妹のお年は姉の帰りを待たずに、さつきから次の間の四畳半に寝ていたのであるが、このとき突然に魘されるような叫び声をあげた。なにか怖い夢でも見たのであろうと、お由は襖をあけて次の間へ行つた。

唸っているお年を呼び起こして介抱すると、少女のひたいには汗の珠がはじき出される

ように流れていた。

お年の夢はこうであった。彼女が姉と一緒に広い草原をあるいていると、姉の姿がいつか白い蝶に化<sup>か</sup>して飛んでゆく。おどろいて追おうとしたが、とても追いつかない。焦<sup>じ</sup>れて、燥<sup>あせ</sup>つて、呼び止めようとするとところを、母に揺り起こされたのである。

その夢の話を聴かされて、お北ははつと思つた。今度こそは本当に顔色を変えたのである。しかもそうになると、白い蝶の一件を洩らすことがいよいよ憚られるように思われて、彼女はやはり口を閉じていた。母も少女の夢ばなしに格別の注意を払わないらしかった。

「子供のうちはいろいろの夢をみるものだ。姉さんはここにいるから、安心しておやすみなさい」

お年は再び眠つた。他の人々も皆それぞれ寢床にはいったが、その後にはなんの出来事もなく、瓜生の一家は安らかに一夜を過ごした。宵からの疲れで、お北も他愛なく眠つた。風は夜のうちに止んでいたが、明るる朝は寒かった。こんにちと違って、その当時の音羽あたりは江戸の場末であるから、庭にも往来にも春の霜が深かった。早起きを習いとする瓜生の家では、うす暗いうちから寢床を離れて、お由は下女に指図して台所に立ち働いていた。お北は表へ出て門前を掃いていると、隣家の黒沼でももう起きているらしく、お

勝も箒ほうきを持って門前へ出てきた。ふたりの娘はゆうべの挨拶を終ると、お勝は摺り寄ってささやくように云った。

「あなた、ゆうべの事を誰かに話しましたか」

「いいえ。まだ誰にも……」

「わたしはお母さまに話したのですよ」と、お勝はいよいよ声をひくめた。「そうしたら、お母さまはもう白い蝶々のことを知っているのです」

「お母さまも見たのですか」

「自分は見ないけれども、その話は聞いているのだそうです。お父さまに話したらば、そんな馬鹿なことを云うなど叱られたので、それぎり誰にも云わなかったのだそうです」

御賭組などはその職務の性質上、どちらかと云えば武士さむらい氣質いかたぎの薄い人々が多いのであるが、お勝の父の黒沼伝兵衛は生まれつき武士氣質の強い男で、組じゆうでも義理の堅い、意地の強い人物として畏敬されていた。その伝兵衛に対してお勝の母が何か怪談めいた事など話した場合、あたまから叱り飛ばされるのは知れ切っていた。

お勝の母の話によると、このごろ夜が更けると怪しい蝶が飛びあるく。それはお勝らが見たのと同じように、普通の物よりやや大きい白い蝶で、それが舞い込んだ家には必ず何

かのわざわいがある。多くは死人を出すと云うのである。

「お母さまがどうしてそんな事を御存じなのでしよう」と、お北は又訊きいた。

「それはね」と、お勝は更に説明した。「四、五日前に白魚しろうおがし河岸のおじさんが御年始おなやにきた時に、お母さまに話したので……。八丁堀でも内々探たんざく索さくしているのだそうです」

白魚河岸のおじさんと云うのは黒沼の親類で、姓を吉田といい、白魚の御納屋おなやに勤めている。吉田は土地の近い関係から、八丁堀同心らとも知合いが多いので、その同心の或る者から白い蝶の秘密を洩れ聞いたらしい。してみると、まんざら無根の流りゅうげん言げんとも云えないのであるが、伝兵衛は飽くまでもそれを否認していた。彼はこんなことまで云った。

「白魚河岸がそんな出たらめを云うのか。さもなければ、この頃はお膝元が太平で、八丁堀の奴らも閑ひまで困るもんだから、そんな、詰まらない事を云い触らして、忙がしそうな顔をしているのだ。ばかばかしい」

こう一と口に云つてしまえばそれ迄であるが、白魚河岸のおじさんは嘘を云うような人ではない。八丁堀の人たちが幾ら閑ひまだからといって、根も葉もないことに騒ぎ立てるはずもあるまいと、お勝の母は夫に叱られながらも、内心はそれを信じていた。

その矢さきに、お勝が現在その白い蝶の飛ぶ姿を見たと言うのであるから、母はいよい

よそれを信じないわけには行かなくなつた。

「それですから当分は夜歩きをしない方がいいと、お母さまは云つて居るのですよ」と、お勝はさらに付け加えた。

## 二

門前の掃除を仕舞つてお北はわが家へはいつたが、今のお勝の話がなんとなく気にかかつて、彼女は暗い心持になつた。

お勝の父がいかにそれを否認しても、白い蝶の怪異はまんざら跡方のないことでも無いように思われた。

ことに妹のお年がゆうべの夢にうなされて、姉が白い蝶に化して飛び去ろうとしたと云う話が、また今更のように思い合わされて、お北は一種の恐怖を感じないわけには行かなかつた。白い蝶と自分とのあいだに、何かの因縁が結び付けられているのではないかとも恐れられた。しかもそれを母や弟に打ちあけるのを憚はばつて、彼女はやはり黙つて朝飯の膳かにむかつた。

「お前はゆうべからどうも顔の色が悪いようだが、まったく風邪かぜでも引いたのじゃあないか」と、母のお由は再び訊いた。

「いいえ、別に……」と、お北はゆうべと同じような返事をしていたが、自分でも少し悪さ寒むげがするように感じられてきた。気のせいか、蟬こめかみ谷もだんだん痛み出した。

弟の長三郎は朝飯の箸をおくと、すぐに剣術の稽古に出て行った。四ツ（午前十時）頃に、父の長八は交代で帰ってきたが、これも娘の顔をみて眉をよせた。

「お北、おまえは顔がよくないようだぞ。風邪でも引いたか」

父からも母からも風邪引きに決められてしまった。お北はどうとう寝床にはいることになつた。下女のお秋は音羽の通りまで風邪薬を買いに出た。

お北は実際すこし熱があるとみえて、床にはいると直ぐにうとうとと眠つたが、やがて又眼がさめると、茶の間でお秋が何事をか話している声がきこえた。お秋が小声で母と語っているのであるが、襖ひとえの隣りであるから、寝ているお北の耳にも大抵のことは洩れきこえた。

「わたくしが薬屋へまいりますと、丁度お隣りのお安さんもお薬を買いに来ていまして、お隣りのお勝さんもやはり寝ておいでなさるそうで……」

「じゃあ、どつちも夜ふかしをして風邪を引いたのだね」と、お由は云った。

「いいえ、それがおかしいので……」

お由は更に声を低めたが、とぎれとぎれに聞こえる話の様子では、かの白い蝶の一件について訴えているらしい。いずれにしても、お勝も床に就いたのである。

「まあ、そんなことがあったのかえ。お北はなんにも云わないので、わたしはちつとも知らなかったが……」と、お由は不安らしく云った。「そうすると、お勝さんもお北も唯の風邪じゃあ無いのかしら」

それから後は又もや声が低くなつたが、やがてお由が台所へさがり、お由は立って父の居間へ行つたらしかつた。そのうちに、お北は又うとうとと眠ってしまったので、その後のことは知らなかったが、ふたたび眼をさますと、もう日が暮れていた。

このごろの癖で、夕方から又もや寒い風が吹き出したらしく、どこかの隙間から洩れて来る夜の風が枕もとの行燈あんどうの火を時々揺らめかしていた。

お北が枕から顔をあげると、行燈の下には母のお由がやはり不安らしい眼色をして、娘の寝顔を窺うように坐っていた。

「どうだえ、心持は……」と、お由はすぐに訊いた。「少しは汗が取れましたかえ」



云われて気がつくど、お北の寝巻は汗でぐっしよりと濡れていた。母は手伝つて寝巻を着かえさせて、娘をふたたび枕に就かせたが、十分に汗を取ったせいか、お北の頭は軽くなったように思われた。それを聴いて、お由はやや安心したようにうなずいたが、やがて又ささやくように話し出した。

「それはまあ好かった。実はわたしも内々心配していたんだよ。どうも唯の風邪でも無いらしいからね。おまえの寝ているあいだに、お隣りの黒沼の小父さんが来て……」

「お勝さんも悪いんですってね」と、お北も低い声で云った。

「けさまでは何ともなかったのだが、お午ひるごろから悪くなって、やつぱりお前と同じように、風邪でも引いたような工く合あいで寝込んでしまったのだが、それには仔細しさいがあるらしいと云うので、黒沼の小父さんが家うちへ聞き合わせに来なすったのだよ。ゆうべの歌留多の帰りに、目白下のお寺の前で、白い蝶々を見たと言うが、それは本当かと云うことだったが、お前も病気で寝ているから、あとで好く訊いておくと返事をして置いたのさ。そうすると黒沼の小父さんは、それでは又来ると云つて出て行ったが、その足で音羽の通りへ出て、あの水引屋の……市川屋の店へ行つて、職人の源蔵に逢つて、何かいろいろ詮議をした末に、源蔵を案内者にして、お寺の方まで行つたのだとき」

黒沼伝兵衛は娘の病氣から白い蝶の一件を聞き出したが、元来そういうたぐいの怪談を信じない彼は、一応その虚実を詮議するために、そのとき一緒に道連れになったと云う市川屋の源蔵をたずねたのである。その結果を早く知りたいので、お北は忙がわしく訊いた。「それからどうして……」

「あの小父おじさんのことだからね」とお由は少しく笑顔を見せた。「なんでも源蔵を叱るように追いまわして、その蝶々を見たのはどの辺かということに嚴重に調べたらしい。蝶々は生垣をくぐつてお寺の墓場へ飛んで行つたと云うので、今度はお寺へはいつて墓場を一一々見てあるいたが、別にこれぞという手がかりも無く、蝶々の死骸らしい物も見付からなかつたそうだよ。それでもまだ気が済まないと見えて、黒沼の小父さんはお寺の玄関へまわつて、坊さんにも逢つて、白い蝶々について何か心あたりはないかと聞き合わせてみたが、お寺の方ではなんにも知らないと言うので、とうとう思い切つて引き揚げてきたそうだが……。なにしろ不思議なこともあるものさね。おまえも本当にその蝶々を見たのかえ」

もう隠してもいられなくなつて、お北はゆうべの一件を母に打ち明けると、お由の顔はまた陰くもつた。若い娘たちが夜ふかしをして、夜道をおるいて、ふたりが同時に風邪を引いた。——そんなことは一向にめずらしく無いのであるが、それに怪しい蝶の一件が絡からんで

いるだけに、二人の病気には何かの因縁があるように思われなくてもなかつた。

「家のお父さまはね」と、お由は又云つた。「ああいう人だから、今度のことについて別に嘘だとも本当だとも云わないけれど、わたしはなんだか気になつて……。もしやお前が悪くでもなつては大変だと、内々案じていたのだが、この分じや仔細も無さそうだ。それにしても、お勝さんの見舞ながらお隣りへ行つて、おまえも確かにその蝶々を見たと言ふことを、小父さんに話して来なければなるまい。わたしはこれからちよつと行つて来ますよ」

お由は有り合わせの菓子折か何かを持つて、直ぐに隣りへ出て行つた。その留守に、お北は妹を枕もとへ呼んで、ゆうべの夢のことに就いて更に詮議すると、お年は確かに姉さんが白い蝶々になつた夢をみたと言つた。子供の夢ばなしなど、ふだんは殆ど問題にもならないのであるが、今のお北に取つては何かの意味ありげにも考えられた。彼女はなんだか薄気味悪くなつて、この部屋のどこかに蝶の白い影が迷つているのでは無いかと、寝ながらに部屋の隅々を見まわした。

半晌ばかりの後に、お由は歸つて来て、娘の枕もとで又こんな事をささやいた。

「おまえとは違つて、お勝さんはどうも容態ようたいがよくないようで、丁度お医者を呼んで来

たところさ。お医者<sup>たち</sup>は質の悪い風邪だと云ったそうだけれど、小父さんはよっぽど心配しているようだったよ」

「小父さんは何と云っているのです」

「黒沼の小父さんはまだ本当にはしていないらしいのだがね。それでも自分の娘が悪くなつたし、お前も確かにその蝶々を見たと言うのだから、少し不思議そうに考えているようだったが……。黒沼の小父さんの話では、それがもう町<sup>まち</sup>方<sup>かた</sup>の耳にもはいつて、内々で探索をしていると云うことだから、嘘か本当かは自然に判るだろうけれど……。まあ当分は日が暮れてから外へ出ないに限りますよ。姉さんばかりじゃない、お年も気をおつけなさい」

娘<sup>いまし</sup>たちを戒めて、その晩は早く寢床に就いたが、表に風の音がきこえるばかりで、この家には何事もなかった。明くる朝はお北の気分もいよいよよくなったが、それでも用心してもう一日寝ていることにしたので、弟の長三郎が代つて門前を掃きに出ると、となりの黒沼には男の子がないので、下女のお安が門前を掃いていた。

ここで長三郎は、お安の口から更に不思議なことを聞かされた。

ゆうべの夜なかに、病人のお勝が苦しそうに唸<sup>うな</sup>り声をあげたので、父の伝兵衛が起きて

行つてうかがうと、お勝の部屋には燈火あかりを消してあつて、一面に暗いなかに小さい白い影が浮いて見えた。それは白い蝶である。蝶は羽はねをやすめてお勝の衾よぎの上に止まつている。伝兵衛は床の間の刀を取つて引返して来て、まずその蝶を逐おおうとしたが、蝶はやり動かない。伝兵衛は刀の鞘のまま横に払うと、蝶はひらひらと飛んで自分の寝巻の胸にはいつた。

伝兵衛は妻のお富をよびおこして手燭をともしさせ、寝巻を払つてあらためたが、どこにも蝶の影は見えなかつた。あなたの眼のせいでしょうとは云つたが、お富も一種の不安を感じないでもなかつた。お勝をゆりおこして訊きいてみたが、お勝は別におそろしい夢に魘うなされたのでも無く、唯うとうとと眠つていて何事も知らないと言つた。

話は単にそれだけのことで、しよせんは伝兵衛の眼の迷いと云うことに帰着してしまつたのであるが、場合が場合であるだけに、どの人の胸にも消えやらない疑いが残つていた。臆病なお安は頭から衾よぎを引つかぶつて夜の明けるまでおちおちとは眠られなかつた。

「黒沼の小父さんも年を取つたな」と、長三郎はその話を聴きながら、肚はらのなかで笑つた。ふだんはそんな怪談をあたまから蹴散らしていながら、いざとなれば心の迷いからそんな怪しみを見るのである。年を取つたと云つても、四十を越してまだ間もないのに、人間

はそんなにも弱くなるものかなどとも考えた。

「そんなことは誰にも話さない方がいい。わたしも黙っているから」と、長三郎はお安に注意するように云った。

「ええ。誰にも云つちやあならないと、御新造ごしんぞうさまからも口止めされているんです」と、お安も云った。

口止めされながら、直ぐに他人にしゃべってしまうのである。長三郎は若い下女の口善くち悪さがないのを憎みながらいい加減にあしらって家へはいった。そうして、朝飯を食ってしまったから、素知らぬ顔で隣りの家へ見舞にゆくと、お勝の容態はやはり好くないらしいかった。

「姉さんは……」と、母のお富が訊いた。

「姉はもう好くなりまして、きょう一日も寝ていたらば起きられるでしょう」

「それは仕合わせでしたな。家の娘はまだこの通りで……」

「御心配ですね」

そんな挨拶をしているうちに、主人の黒沼伝兵衛が奥から出て来た。

「長さん。こつちへ来てくれ」

長三郎を自分の居間へよび入れて、伝兵衛はしずかに云い出した。

「若い者の手前、まことに面目のないことだが、ゆうべは少し失策をやったよ」

「どんなことですか」

長三郎はやはり素知らぬ顔をしていると、伝兵衛は自分の口から白い蝶の話をはじめた。それはさつきお安が長三郎に洩らしたと同じ出来事であった。伝兵衛は正直にゆうべの失策を打ちあげた後に、みずから嘲るように苦笑いをした。

「わたしも小身ながら武士の端くれだ。世に不思議だの、妖怪だのと云うものがあるとは思っていない。怪力乱神を語らずとは、孔子も説いている。かの白い蝶の一件は、先日も白魚河岸の親類が来て、何か家内に話して行ったそうだが、わたしは別に気にも掛けずにいた。いや、まったくばかばかしい話だと思っていたのだ。ところが、おとといの晩は家のお勝も見た。お前の姉さんも見たと云う。まだそればかりでなく、あの水引屋の……職人の源蔵も見たと云う。源蔵は正直者で、むやみに嘘を云うような男でもない。してみると、これには何か仔細があるらしく思われる。就いては、物は試した。わたしは今夜、目白坂の辺へ行つて、果たしてその白い蝶が飛ぶかどうかを探索してみようと思うのだが、どうだ、お前も一緒に行つてみないか」

その頃の若侍のあいだには「胆きとだめし」と唱えて、あるいは百物語を催し、あるいは夜ふけに墓場へ踏み込み、あるいは獄門首の晒さらされている場所をたずねる、などの冒険めいた事がしばしば行なわれていた。伝兵衛が長三郎を誘ったのも、その意味である。長三郎のかよっている剣術の道場でも、これまで往々にそんな催しがあつたが、彼はまだ十五歳の前髪であるので、とかくにその仲間から省はぶかれ勝ちであるのを、彼はふだんから残念に思っていた。その矢さきへ、この相談を持ち掛けられたのであるから、長三郎はよろこんで即座に承諾した。彼はぜひ一緒に連れて行ってくれと答えると、伝兵衛は然さもこそと云うようにうなずいた。

「むむ。お前ならばきつと承知するだろうと思つた。では、今夜の五ツ頃（午後八時）から出かける事にしよう。だが親父やおふくろが承知するかな」

「夜学に行くことにして出ます」

長三郎は護国寺門前まで漢籍の夜学に通うのであるから、両親の手前はその夜学にゆくことにして怪しい蝶の探索に出ようと云うのである。その相談が決まって、彼は威勢よく我が家へ帰つた。

「あなたはともかくも、年の若い長さんなどを連れ出して、なにかの間違いがあると困り



ますよ」と、妻のお富は不安そうに云った。

「なに、あいつは年が行かないでも、なかなかしつかりしているから、大丈夫だよ」  
伝兵衛は笑っていた。

三

廿日正月はつかしようがつという其の日も暮れて、宵闇よいやみの空に弱い星のひかりが二つ三つただよっていた。今夜も例のごとく寒い風が吹き出して、音羽の大通りに渦巻く砂をころがしていた。

「寒い、寒い。この正月は悪く吹きやあがるな。ほんとうに人泣かせだ」

この北風にさからって江戸川橋の方角から、押し合うように身を摺り付けて歩いて来たのは、二人の中ちゆうげん間である。どちらも少しく酔っているらしく、その足もとが定まらなかつた。

「いくら寒くつても、ふところさえ温あつたかけりやあ驚くこともねえが、陽気は寒い。ふところは寒い。内そとから責められちやあやり切れねえ」と、ひとりが云った。

「まったくやり切れねえ」と、他のひとりも相槌あいつちを打った。

「仕方がねえ。叱られるのを承知で、また御用人を口説くどくかな」

「いけねえ、いけねえ。うちの用人と来た日にやあとでもお話にならねえ。それよりもお近ちかに頼んだ方がいい。たんとの事は出来ねえが、一朱や二朱ぐれえの事はどうかしてくれらあ」

「お近に……。おめえ、あの女に借りたことがあるのか」

「ほかの者にやあどうだか知らねえが、おれには貸してくれるよ」

「まさか情夫いろになつた訳じゃあるめえな」

「情婦いろになつてくれりやあいいが、まだそこまでは運びが付かねえ」

「それにしても、不思議だな。あの女がおめえに金を貸してくれると云うのは……。どうして貸してくれるんだよ」

「はは、それは云えねえ。なにしろ、おれには貸してくれるよ。おれが口説けば、お近さんは貸してくれるんだ」

「それじゃあ、おれも頼んでみようかな」

「馬鹿をいえ。おめえなんぞが頼んだつて、四文も貸してくれるもんか。はははははは」

こんなことを話しながら、押し合つてゆく二人のうしろには、又ひとつ黒い影が付きま  
とつていた。音羽の七丁目から西へ切れると、そこに少しばかりの畑地がある。そこへ来  
かかった時に、むこうから拍子木の音が近づいて、火の番の藤助の提灯がみえた。

「今晚は」と、藤助が先ず声をかけた。

「やあ、御苦労だな」と、中間のひとりが答えた。「べらぼうに寒いじゃあねえか」

「お寒うございますな」

「いくら廻り場所だつて、こんなところを正直に廻ることもあるめえ。ここらにやあ悪い  
狐がいるぜ」と、他のひとりが笑いながら云つた。

「なに、狐の方でもお馴染だから大丈夫ですよ」と、藤助も笑いながら云つた。「おまえ  
さん方は今夜も御機嫌ですな」

「あんまり御機嫌でもねえ。無けなしの銭でちつとばかりの酒を飲んで、これから帰ると  
門番に文句を云われて、御用人に叱られて、どうで碌なことじゃあねえのさ」

「そう云つても、こいつにはお近さんと云ういい年増が付いているのだから仕合わせだよ」  
「ええ、つまらねえことを云うな」

「お近さん……」と、藤助の眼は暗いなかで梟のふくろうように光つた。「お近さんと云うのは、

お屋敷のお近さんですかえ」

「むむ、そうだ」

中間はなま返事をして、そのまま歩き出した。

他のひとりも続いて行つた。藤助はまだ何か訊ききたそうな様子で、ふた足ばかり行きかけたが、又思い直したらしく、中間どものうしろ姿を見送つたばかりで引返して大通りへ出ようとするとき、彼は何かに驚かされたように、俄かに畑のかたを見返ると、そこには小さくうづくまつている物があつた。それは狐ではない。人であるらしかつた。

人は這うように身をかがめて、畑から往来へ忍び出たかと思うと、草履の音をぬすんで、かの中なか間共のあとを追つて行くらしかつた。それと同時に、藤助の提灯の火は風に吹き消されたのか、わざと吹き消したのか、たちまちに暗くなつた。彼もまた抜き足をして、その黒い影のあとを追つて行つた。

一方にこういう事のあるあいだに、又一方には目白坂下の暗い寺門前に、二つの暗い影がさまよつていた。それは黒沼伝兵衛と瓜生長三郎で、かれらは昼間の約束通りに、白い蝶の正体を見とどけに来たのである。長三郎は小声で云つた。

「小父さん。この辺ですな」

「この辺だ。きのう源蔵に案内させて、よく調べて置いた。蝶々はあの生垣をくぐつて、墓場へ舞い込んだと云うことだ」と、伝兵衛は暗いなかを指さした。

「毎晩ここらへ出るのでしょうか」

「それは判らない。だが、まあ、ここらに網を張っているよりほかはあるまい。風を避けよるために、この門の下にはいつている」

「なに、構いません。わたしはそこらへ行つて見て来ましょうか」

「むむ、犬もあるけば棒にあたると云うこともある。ただ突つ立っているよりも、少し歩いてみるかな」

「小父さんはここに待ち合わせていて下さい。わたしがそこらを見廻つて来ます」

云うかと思うと、長三郎は坂の上へむかつて足早に歩き出した。風はなかなか吹き止まないで、寺内の大きい櫓けやきの梢をひゅうひゅうと揺すつて通ると、その高い枝にかかっている破れ紙鳶だこが怪しい音を立ててがさがさと鳴った。

強い風をよけながら、暗いなかに眼を配つて、長三郎は坂の上まで登り切ると、とある屋敷の横町から提灯の火がゆらめいて来た。どこをどう廻つて来たのか知らないが、火の番の藤助はここへ出て来たのである。彼は拍子木を鳴らしていなかったが、その提灯のひ

かりで長三郎は早くも彼を知った。

「おい、火の番。今夜はここらで蝶々の飛ぶのを見なかったかね」と、長三郎は近寄って声をかけた。

「おお、瓜生の若旦那ですか」と、藤助は少しく提灯をかざして、長三郎のすがたを透かし視た。「あなたは蝶々を探しておいでなさるんですか」

「おとといの晩、うちの姉さんがここらで白い蝶々を見たと言うから、わたしも今夜さしに来たのだ。おまえも見たことがあるそうだね」

藤助はそれに答えないで、また訊きいた。

「その蝶々をさがして、どうなさるんです」

「どうと云うことも無いが、その蝶々が何だかおかしいから、つかまえて見ようと思うのだ」

「つかまえて……どうなさるんです」

「唯、つかまえるだけの事だ」と、長三郎はその以上のことを洩らさなかった。

「それならばお止めなさい」と、藤助は諭さとすように云った。「白い蝶々の飛ぶことはあります。寒い時に蝶々が飛ぶ。……考えてみれば不思議ですが、それには又なにか仔細があ

るのでしよう。お武家のあなたの方がそんなことにお係り合いなさらぬ方がよろしいんです」  
 「いや、少し訳があるので係り合うのだ。それで、おまえは今夜も見たのか」

藤助は首を振った。

「その蝶々の飛ぶのは、ここらに限ったことじゃありません。毎晩屹度きつとここらへ出ると決まっているんじゃないやありませんから、探してお歩きなすつても無駄なことですよ。今夜はあなたお一人ですか。それともお連れがあるんですか」

なんと答えてよいかと、長三郎はやや躊躇したが、やがて正直に云った。

「実は黒沼の小父さんと一緒に来たのだ」

「黒沼の旦那……」と、藤助は冷やかに云った。「その旦那はどこにおいでです」

「坂下の門前に待っているのだ」

「はあ、そうですね」

藤助の声はいよいよ冷やかに聞こえたばかりでなく、提灯の火に照らされた其の顔には冷やかな笑いさえ浮かんだ。

「今も申す通り、ここらを探しておいでになっても、白い蝶々はめつたに姿を見せやあしませんよ。かぜでも引かないうちに、早くお引き揚げになった方が、よろしゅうございま

しよう」

彼はこう云い捨てて、軽く会えしやく釈やくしたままで立ち去ったが、長三郎はまだ其処にたたずんでいた。

拍子木ひょうしぎの音は坂を横ぎつて、向う横町の方へだんだんに遠くなるのを聞きながら、長三郎は考えた。藤助の話によると、白い蝶は毎晩ここらに出ると限ったわけでも無いと云う。それは自分も覚悟して来たのであるが、ここらを毎晩廻っている火の番がそう云う以上、めつたに姿を見せない蝶をたずねて、いつまでも寒い風のなかに徘徊しているのは、なんだかばかしいように思われて来た。

「いっそ小父さんに相談して来ようか」

彼は引つ返そうとして、また躊躇した。折角ここまで踏み出して来ながら、まだ碌々の探索もしないで引つ返しては気怏きわくれがしたようにでも思われるかも知れない。長三郎は意気地なしであると、黒沼の小父さんに笑われるのも残念である。ともかく、もう少し歩いてみた上の事だと、長三郎は思い直して又あるき出したが、闇のなかには彼の眼をさえぎる物もなかった。

まだ五ツ半（午後九時）を過ぎまいと思われるのに、ここらの屋敷町はみな眠ってしま



つたように鎮まっていた。唯きこえるのは風の音ばかりである。

長三郎はあても無しに其処らを一巡して、坂の上まで戻つて来ると、だんだんに更ふけてゆく夜の寒さが身に沁み渡つた。

「小父さんも待つているだろう」

もうこのくらいで引返してもよからうと思つて、長三郎は坂を降りた。もとの寺門前へ来かかつた時に、彼は俄かに立ちどまつて、口のうちであつと叫んだ。大きい白い蝶が闇のなかにひらひらと飛んでゆくを見たのである。彼は眼を据えて、その行くえを見定めようとする間に、怪しい蝶の影は忽ち消えるように隠れてしまった。

早くそれを小父さんに報告しようと、彼は足早に門前へ進み寄つたが、そこに伝兵衛のすがたは見いだされなかつた。わたしの帰りの遅いのを待ちかねて、小父さんもどこへか出て行つたのかと、長三郎は暗い門前を見まわしているうちに、その足は何物にかつまずいた。それが人であるようにも思われたので、彼はひざまずいて探つてみると、それは確かに人であつた。しかも大小をさしていた。

長三郎ははつと思つて慌てて其の人をかかえ起こした。

「小父さんですか。黒沼の小父さん。……小父さん」

人はなんとも答えなかつた。しかもそれが伝兵衛であるらしいことは、暗いなかにも大抵は推察されたので、長三郎はあわてて又呼びつづけた。

「小父さん……小父さん……。黒沼の小父さん」

その声を聞き付けたらしく、どこからか提灯の火があらわれた。それは火の番の藤助である。彼は提灯をかざして近寄つた。

「どうかなすつたんですか」

「あかりを見せてくれ」と、長三郎は忙がわしく云つた。

その火に照らされた人は、まさしく黒沼伝兵衛であつた。彼は刀の柄つかに手をかけたまま、息が絶えていた。慌てながらもさすがは武家の子である。長三郎は直ぐにその死骸をひきおこして身内みうちをあらためたが、どこにも斬り傷または打ち傷らしい痕も見いだされなかつた。

「早く水を持って来てくれ」と、長三郎は藤助を見かえつた。

藤助は提灯をかざした儘で、唯だまって突つ立っているの、長三郎は焦じれるように又云つた。

「おい。この寺へ行つて、早く水を貰つて来てくれ」

「寺はもう寝てしまいましたよ」と、藤助はしずかに云った。

「それじゃあ井戸の水を汲んで来てくれ」

「水を飲ませたぐらいで、生き返るでしょうか」

「なんでもいいから、早く水を汲んで来い」と、長三郎は叱り付けるように叫んだ。

藤助は無言で寺の門内にはいった。提灯は彼と共に去ってしまったので、門前はもとの闇にかえった。その暗いなかで、長三郎は黒沼の小父さんの死骸をかかえながら、半分は夢のような心持で、氷った土の上に小膝をついていた。

その夢のような心持のなかでも、彼はかんがえた。小父さんが急病で仆たおれたので無いことは、刀の柄つかに手をかけているのを見ても判っている。小父さんは何物にか出会って、刀をぬく間もなしに仆たおれたのである。長三郎はかの白い蝶を思い出した。自分はたった今、こちらで怪しい蝶の影をみたのである。小父さんはかの蝶のために仆たおされたのではあるまいか。長三郎は一種の恐怖を感じると共に、又一方にはおさえがたい憤怒ふんぬが胸をついた。

「畜生、おぼえている」

彼は肚はらのなかで叫びながらあたりの闇を睨にらんでいるとき、藤助の提灯の火が鬼火おにびのように又あらわれた。彼は片手に小さい手桶をさげている。

血のめぐりが悪いのか、あるいは意地が悪いのか、こういう場合にも彼はさのみに慌てている様子もみせず、いつもの足取りで徐かに歩いて来るらしいのが、又もや長三郎を焦らせた。  
燥たせた。

「おい。早く……早く……」

呶鳴り付けられても、彼はやはり騒ぎもせず、無言で門へ出て来ると、長三郎は引つたくるようにその手桶を受け取った。手桶に柄杓が添えてあるので、長三郎はその柄杓に水を汲んで、伝兵衛の口にそそぎ入れた。

「小父さん……小父さん……。しつかりして下さい」

伝兵衛は答えなかつた。柄杓の水も喉へは通らないらしかつた。それが当然であると思つているかのように、藤助は黙つて眺めていた。

「仕方がない。寺へ連れ込んで、医者を呼ぼう」と、長三郎は柄杓を投げ捨てながら云つた。

藤助はやはり無言で立っていた。どこかで梟の声がかきこえた。

#### 四

黒沼伝兵衛の死骸は寺内へ運び込まれた。とかくに落ち着き顔をしている火の番の藤助を追い立てるように指図さしずして、長三郎は近所の医者を迎えにやった。近所といっても四、五丁はな距れているので、藤助は直ぐに帰って来ない。そのあいだに、寺僧も手伝って種々介抱に努めたが、伝兵衛の死骸は氷のように冷えて行くばかりであった。

「お気の毒なことでござるな」と、住職ももう諦めたように云った。

長三郎は無言で溜め息をついた。飛んだことになってしまったと、今夜の企くわだてを今さら悔むような心持になった。しかもそんな愚痴を云っている場合ではない。しよせん蘇そせい生の望みがないと諦めた以上、医者いしやの来るのを待っているまでもなく、一刻も早く黒沼の家へ駈け付けて、この出来事を報告して来なければなるまいと思ったので、彼は死骸の番を寺僧に頼んで表へ出た。

寺では提灯を貸してくれたので、長三郎はそれを振り照らして出たが、風が強いのと、あまりに慌てて駈け出した為に、寺の門を出てまだ三、四間も行き過ぎないうちに、提灯の火はふつと消えてしまった。また引つ返すのも面倒であるので、さきを急ぐ長三郎は暗いなかを足早たどに辿って行くと、どこから出て来たのか、突き当たらんばかりに、ひとりの

男が小声で呼びかけた。

「あ、もし、もし……」

不意に声をかけられて、長三郎はぎよつとして立ち停まったが、相手のすがたは闇につままれて見えなかった。

「あのお侍さんは死にましたか」と、男は訊きいた。

なんと答えていいかと、長三郎はすこし躊躇ちゅうちゆしていると、男は重ねて云った。

「あのかたは何と仰しやるんです」

長三郎はこれにも答えることは出来なかった。黒沼伝兵衛が往来なかで訳のわからない横死おうしを遂げたなどと云うことが世間に洩れうかつきこえると、あるいは家断絶せつというような大事になるかも知れないのであるから、迂闊うかつな返事をすることは出来ない。殊に心の急せいでいる折柄、こんな男に係り合っているのは迷惑でもあるので、彼は無愛想に答えた。

「そんなことは知らない」

「お若いかったですか」

「知らない、知らない」

云い捨てて長三郎は又すたすたと歩き出すと、男は執念深く付いて来た。

「それから、あの……」

まだ何か訊こうとするらしいので、長三郎は腹立たしくなった。それには云い知れない一種の不安も伴って、彼は無言で逃げるように駈け出した。暗闇を駈けて、音羽の大通りの角まで来ると、彼はまた何者にか突き当たった。

「瓜生さんの若旦那ですか」と、相手は声をかけた。

それは藤助である。彼の持つている提灯も消えているらしい。

「医者……」と、長三郎はすぐに訊いた。

「もう寝ているのを叩き起こしました。あとから参ります」

「じゃあ。頼むよ」

長三郎はそのまま駈けつづけて、自分の組屋敷へ帰った。もうこうなつては親たちに隠して置くことは出来ない。あとでどんなに叱られるにしても、万事を正直に報告して置かなければならないと思つたので、彼は先ず自分の家へ立ち寄ると、父も母も意外の報告におどろかされた。父の長八は慌てて身支度をして伴と一緒に表へ飛び出した。

二人はとなりの黒沼の門を叩くと、妻のお富も娘のお勝も玄関に出て来た。かれらも意外の報告におどろかされて、直ぐに其の場へ駈け付けることになった。主人のほかには男

のない家うちであるから、お富とお勝が出て来た。

男ふたりと女ふたり、四つの提灯の火は夜風にゆらめきながら、凍った道を急いで目白坂下へゆき着くと、彼等よりも先きに医者いしやが来ていた。医者いしやはもう蘇生そせいの見込みはないと云った。

しかし伝兵衛の死因は不明であった。身内になんの疵きずらしいものも見いだされず、さりとて急病ともおもわれず、まことに不思議の最期さいごであると、医者いしやも首かしを傾かげていた。刀に手をかけていたのを見ると、なにか怪しい物にでも出会って、異常の驚愕おどろか恐怖おそのために心の臓しんを破ったのではあるまいかと、医者いしやは覚おぼ束つかなげに診断しんした。寺の住職しゆじやくも先ずそんなことであろうと云った。長八親子は途方に暮れたように歎息なげした。お富は泣き出した。

「さて、これからだ」

長八は膝ひざに手を置いて、その太眉くもを陰くもらせた。長三郎も薄々うすうすあやぶんでいた通り、これが表向きになると黒沼くろぬまの家に疵きずが付かないとも限らない。死んだ者は余儀あやないとしても、その家の跡目あとめが立たないようでは困る。長八は差しあたりその善後策ぜんごさくを考えなければならなかった。

この時代の習いとして、こういう場合には本人の死かを秘かくして、娘むすめに急養子きやうしをする。そう



して、まず養子縁組の届けをして置いて、それから更に本人急死の届けを出すことになる。一面から云えば、まことに見え透いた機関からくりではあるが、組頭もその情を察して大抵はその養子に跡目相続を許可することになっている。今度の事件もその方法によつて黒沼家の無事を図るはかのほかは無い。

「あとあとのこともいろいろござるに因つて、今夜のことは何分御内分に……」

と、長八は住職と医者に頼んだ。彼等もその事情を察しているので、異議なく承知した。医者は承知、寺の方も住職が承知した以上、他の僧らも口外する筈はあるまい。残るは火の番の藤助である。彼にも口留めをして置く必要があるので、長八は伴に云いつけて藤助を探させたが、その姿は見えなかつた。

寺の話によると、彼は医者を迎えに行つたまままで帰らないと云う。彼は医者の門を叩いて急病人のあることを知らせ、その帰り途で長三郎に出逢つたことまでは判っているが、それから寺へも帰らずに何処へ行つてしまつたのかと人々も少しく不審をいだいたが、この場合、その詮議に時を移してもいられないので、長八は住職と相談の上で近所の駕籠を呼ばせ、急病人の体ていにして伝兵衛の死骸を運び出すことにした。そうした秘密の処置を取るには、暗い夜更けが勿怪もつけの仕合わせであつた。

これで先ず死骸の始末は付いたが、長八の一存で万事を取り計らうわけにも行かないので、彼は組じゅうでも特別に親しくしている四、五人に事情を打ち明けて、とりあえず急養子の手続きを取るようになった。

前にも云う通り、黒沼の親戚の吉田幸右衛門というのは京橋の白魚河岸に住んで、白魚の御納屋に勤めている。その次男の幸之助はことし廿歳はたちで、行くゆくは黒沼の娘お勝の婿になるという内相談も出来ていたのであるから、この際早速にその縁組を取り結ぶことにした。勿論それについてお富にもお勝にも異存はなかった。吉田の家でも不慮の出来事におどろくと共に、当然の処置として幸之助の養子縁組をころよく承諾した。

すべての手続きはとどこおりなく運ばれて、黒沼の家には何のさわりもなく幸之助がその跡目を相続することになったので、関係者一同も先ずほっとした。伝兵衛の死も表向きは急死という届け出になっているのであるから、死骸の検視のことも無くて、そのまま菩提寺へ送られた。

こうして、この奇怪なる事件も闇から闇へ葬られてしまったが、解けやらない疑いの雲は関係者の胸を鎖とぎしていた。長三郎は飛んだことに係り合った為に、勿論その両親から厳しく叱られたが、今さら取り返しの付かないことである。それよりも気にかかるのはかの

藤助の身の上で、万一口から当夜の秘密を世間に抔められては面倒である。長八はその翌朝、長三郎を遣わして藤助の在否をさぐらせたが、彼はゆうべから戻らないと云うので、むなしく引つ返して来た。

「どうもおかしいな」

長八はきょうもそれを云い出した。伝兵衛の葬式とむらいを済ませた翌日の朝である。かの一件以来、寒い風が意地悪く毎日吹きつけていたのであるが、けさはその風も吹きやんで俄かに春めいた空となった。長八が自慢で飼っている鶯も、朝から籠のなかで啼いていた。「もう一度、行ってみましょうか」と、長三郎は父の顔色をうかがいながら云った。

「むむ。あの晩ぎりで、藤助のゆくえが知れないと云うのは、どう考えてもおかしい。あいつも殺されたのかな」

「さあ」と、長三郎もかんがえた。「殺されたのでしょうか」

「殺されたかも知れないぞ」

「それならば、どこからか死骸が出そうなものですが……」

「それもそうだな……。といって、仔細もなしに姿を隠す筈もあるまい。係り合いを恐れたかな」

黒沼伝兵衛の横死について、自分もその場に居合わせた関係上、なにかの係り合いになることを恐れて逃げ去ったかとも思われるが、自分ひとりでなく、その場には長三郎も立ち会っていたのであるから、我が身に曇りのない申し開きは出来る筈である。女子供では無し、分別盛りぶんべつの四十男がそれだけの事で姿を隠そうとも思われませんが、案外の小胆者で唯一途いちずに恐怖を感じたのかも知れない。いずれにしても、もう一度詮議して置く必要があると、長八は思った。

「では、行つて見て来い。やはり帰っていないようであつたら、近所の者にも訊きいてみる。だが、よく気をつけてこちらの秘密を覚られるなよ」

「承知しました」

長三郎はすぐに表へ出てゆくと、一月末の空はいよいようららかに晴れて、護国寺の森のこずえは薄うす紅あかく霞んでいた。音羽の通りへ出ると、市川屋の職人源蔵に逢った。

「黒沼の旦那様は飛んだことでごぎいましたね」と、源蔵は挨拶をした。

「丁度いい所でおまえに逢った。火の番の藤助はこの頃どうしているね」と、長三郎は何げなく訊いた。

「いや、それが不思議で、この廿日正月の晩から行くえが知れなくなってしまうのです。

近所でも心配しているんですが、まだ判りません」

火の番はいわゆる番太郎で、普通は自身番の隣りに住んで荒物屋などを開いているのであるが、この町の火の番は露路ろじのなかに住んでいた。藤助も以前は表通りに小さい店を持つていたのであるが、三年前に女房に死に別れて、店のあきないをする者がなくなったので、町内の人々の諒解を得て、店は他人にゆずり自分は露路の奥に引っ込んで、やはり町内の雑用ぞうようを勤めているのであった。

「藤助には娘があつたね」と、長三郎は又訊いた。

「お冬という娘がございます」と、源蔵はうなずいた。「明けて十五で、人間もおとなしく、容貌きりようもまんざらでないんですが、可哀そうに、子供の時に疱瘡ほうそうが眼に入ったものですから、右の片眼が見えなくなつてしまいました」

「その娘も心配しているだろうね」

「もちろん心配して、お神籤みくじを引いたり、占うらないに見て貰つたりしているんですが、どうもはつきりした事は判らないようです」

これだけ聞けば、その上に詮議の仕様もないように思われたが、ともかくも藤助の家の様子を一応は見とどけて帰ろうと思ひ直して、長三郎はその案内をたのむと、源蔵は先き

に立つて自身番に近い露路のなかへはいった。長三郎もあとに付いて、昼でも薄暗いような露路の溝どぶいた板を踏んで行つた。

露路の入口は狭いが、奥には可なりに広いあき地があつて、ここら特有の紙漉場かみすきばなども見えた。藤助の家にも小さい庭があつて、桃の木が一本立っていた。

「ふうちゃん、居るかえ」

源蔵は表から声をかけたが、内には返事が無かつた。三度つづけて呼ぶうちに、その声を聞きつけて、裏の井戸端からお冬が濡れ手を前垂れで拭きながら出て来た。

お冬は十五にしては大柄の方で、源蔵の云つた通り、容貌はまず十人並み以上の色白の娘であつた。右の眼に故障があるか無いかは、長三郎にはよく判らなかつた。

「お父さんとつのたよりはまだ知れないかえ」と、源蔵は縁に腰をかけて訊いた。

お冬は無言で悲しそうになずいたが、源蔵のうしろに立っている前髪の侍をちらりと視たときに、彼女は慌てたように眼を伏せた。

「この若旦那は瓜生さんと仰しやつて、このあいだ亡なくなつた黒沼さんのお屋敷の隣りにいらつしやるのだ」と、源蔵はあらためて長三郎を紹介した。「お前のお父さんに逢つて、なにか訊きたいことがあると云うので、ここへ御案内して来たんだが、お父さんがまだ帰

らねえじゃあ仕様がねえな」

お冬はやはり俯向うつむいて黙っていた。藪うぐいすか籠の鶯か、ここでも遠く啼く声がきこえた。江戸といつても、ここらの春はのどかである。紙漉場の空地あきちには、子どもの小さい風が一つあがっていた。それを見かえりながら、源蔵は又云い出した。

「だが、まあ、そのうちにはなんとか判るだろう。神隠しに逢ったにしても、大抵は十日か半月で帰つて来るものだ。あんまり苦くにしねえがいい」

こんなひと通りの気休めで満足したかどうだか知らないが、お冬はやはり黙っていた。そうして時々、若い侍の顔をぬすみ視ているらしいのが源蔵の注意をひいた。

「ふうちゃん。煙草の火はねえかえ」

お冬は気がついたように立ち上がって、煙草盆に消し炭の火を入れて来ると、源蔵は腰から筒すざしの煙草入れを取り出して、一服喫すいはじめた。

## 五

ともかく藤助一家の様子を見届けて、もう此の上に詮議の仕様もないと思ひ切つた長三

郎は、源蔵を眼でうながして行きかかると、源蔵も早々に煙草入れをしまつて立ち上がった。

「じゃあ、ふうちゃん、又来るからな」

お冬はやはり無言で会えしやく釈やくした。唾でも無いのになぜ終始黙っているのかと、長三郎はすこし不審に思ったが、深くも気に留めずに表へ出ると、源蔵もつづいて出て来た。

「まったくあの娘も可哀そうですね」

「そうだな」と、長三郎も同情するように云った。

「なにかまだほかに御用は……」と、源蔵は訊いた。

「いや、わたしももう帰る。忙がしいところを気の毒だったな」

「いえ、なに……。わたくし共の店も此の頃は閑ひまですから、毎日ぶらぶら遊んでいます。忙がしいのは暮の内で、正月になると仕事はありません」

「そうだろうな」

云いかけて、ふと見かえると、露路の入口にはお冬が立っていた。

彼女は濡れた前垂れの端はしを口にくわえながら、その片眼に何かの意味を含んでいるように、こちらをじつと窺うかがっているらしかった。源蔵も気がついて見返したが、別になんにも



云わなかつた。二人が道のまん中で別れるのを、お冬は暫く見送っていたが、やがて足早に引つ返して露路へはいった。

長三郎は家へ帰つて、ありのままに報告すると、父の長八は唯だまつてうなずいていた。この上は藤助が果たして何者かに殺されたのか、あるいは無事に何処からか現われて来るか、自然にその消息の知れるのを待つほかは無かつた。長八は倅に注意して、今後も油断なく藤助の安否を探れと云い聞かせて置いた。

ことし十五歳で、まだ部屋住みの長三郎は、玄関に近い三畳の狭い部屋に机を控えていた。父の前をさがつて、自分の部屋に帰つて、彼は再び藤助の身の上について考えた。

藤助は生きているか、死んでしまつたか。それにつけて思い出されるのは、当夜の彼の行動である。自分の近所に住んでいる御賄組の武士が怪しい変死を遂げたのを見て、火の番の彼は当然おどろき騒ぐべき筈であるのに、案外に彼は落ち着いていた。落ち着いていたと云うよりも、むしろ冷淡であるようにも見えた。長三郎が焦れて指図するので、彼はよんどころ無しに働いているようにも見えた。これには何かの仔細があるのではないかと、長三郎は考えた。

彼は長三郎に追ひ立てられて、渋々ながら医者を呼びに行った。その帰り路にゆくえ不

明となつたのである。そのほかにも、暗いなかで長三郎に突き当たつて、声をかけた者がある。彼は何者であろうか。心が急せくので碌々に返事もせず別れてしまつたが、彼もこの事件に何かの関係のある者ではあるまいか。あるいは彼が藤助を捕えて行つたのか、あるいは藤助を殺して、その死骸をどこへか隠したのかと、長三郎はまた考えた。しかも暗がりの出来事であるから、その相手の人相や風俗はちつとも判らなかつた。

黒沼伝兵衛の死——藤助のゆくえ不明——暗がりの怪しい男——この三つを一つに結びつけていろいろ考えたが、何分にも世故せこの経験に乏しい長三郎の頭脳あたまでは、その謎を解くべき端緒たんちよを見いだし得なかつた。

ひる過ぎになつて、となり屋敷の黒沼幸之助が来た。

「このたびはひとかた一方ならぬ御厄介に相成りまして、なんともお礼の申し上げようもございません」と、彼は長八に対して丁寧ていねいに挨拶した。

同じ組の者は他に幾人もあるが、瓜生家とは隣り同士でもあり、多年特別に懇意こんいにしていた関係上、今度の一件について長八が最も尽力したのは事実であつた。

「いや、あなたこそ何かとお疲れでしたらう」と、長八も会釈した。

どこの家でも葬式などは面倒なものである。まして急養子の身の上で、家内の勝手もわ

からず、組内の人々の顔さえも碌々に知らない幸之助が、一倍の気苦勞をしたことはよく察せられるので、長八もその点には同情していた。お疲れでしたと云う言葉も、形式一遍の挨拶ではなかつた。

「ありがとうございます。おかげさまで、どうかとどこおりなく片付きました」と、幸之助はふたたび挨拶をした。

「そこで、御新造は……」

「まだ臥せ<sup>ふ</sup>つて居ります」

お勝は病中であるにも拘らず、父の急変におどろかさされて、母と共に現場へ駆けつけたばかりか、その翌日も無理に起きていたので、病気はいよいよ重くなつた。彼女は母のお富と、新しい婿の幸之助とに看病されて、その後も床に就いているのである。彼女は父の葬式に列<sup>つら</sup>なることも出来なかつた。葬式やら、病人やら、黒沼家の混雑は思いやられて、長八はますます同情に堪えなかつた。

「就きましては、明日は初七日<sup>しよなか</sup>の速夜<sup>たいや</sup>に相当いたしますので、心ばかりの仏事を営みたいと存じます。御迷惑でもございませうが、御夫婦と御子息に御列席を願いたいのでございませうが……」

「いや、それは御丁寧に恐れ入ります。一同かならず御焼香ごしょうこうに罷り出まかでます」と、長八は答えた。

これで正式の挨拶も終わったところへ、娘のお北が茶を運んで来た。まだ馴染なじみの浅い仲とはいいながら、客と主人はやや打ち解けて話し出した。

「御承知でございますか。護国寺前の一件を……」と、幸之助はお北のうしろ姿を見送りながら少しく声を低めた。

「護国寺前……。何か、一向に知りません」と、長八は茶を喫のみながら云った。「白い蝶でも又出ましたか」

「そうでございます」と、幸之助はうなずいた。

「え、ほんとうに出ましたか、白い蝶が……」

「護国寺前……東青柳町あおやぎちように野上佐太夫というお旗本がありますそうで……。わたくしは昨今こちらへ参りましたのでよくは存じませんが、三百石取りのお屋敷だとか承わりました。昨夜の五ツ過ぎに、大塚仲町なかもち辺の町家の者が二人連れで、その御門前を通りかかりますと、例の白い蝶に出逢いましたそうで……」

「ふうむ」

長八は唸るような溜め息をつきながら、相手の顔をながめていると、幸之助は更に説明した。

その二人連れは大塚仲町の越後屋という米屋の女房と小僧で、かの野上の屋敷の門前を通り過ぎようとする時に、暗闇のなかから一羽の蝶が飛び出した。そうしてひらひらと女房の眼のさきへ舞って来ると、女房は声も立てずに其の場に悶絶もんぜつした。小僧は途方に暮れてうろろうろしている処へ、幸いに通り合わせた人があったので、共々に介抱して近所の辻番所へ連れて行くと、女房は幸いに正氣に復かえったが、自分にもどうしたのかよくは判らない。ただ眼のさきへ大きい白い蝶が飛んで来たかと思うと、たちまち夢のような心持になつてしまつて、その後のことは何も知らないと言うのであつた。

以上は世間の噂話を聴いたに過ぎないので、幸之助もくわしい事実を知らないのであるが、ともかくも奇怪な白い蝶が闇夜にあらわれて、往来の人をおびやかしたという噂が彼の注意をひいたのである。その話を終つた後に、彼は又云つた。

「白い蝶の噂は京橋の実家に居るときから聴いて居りまして、八丁堀の役人たちも内々探索しているとか云うことでしたが、こうしてみるとやはり本当かと思われまます」  
 「本当でしょう」と、長八もうなずいた。「現にわたしの家の娘うちも見たと云います。あな

たのお父さまの亡なくなられた晩にも、伴の長三郎がそれらしい物を見たとか云います。市川屋の職人も見たことがあると云う。一人ならず、幾人もの眼にかかった以上、それが跡方もないこととは云われますまい」

とは云つたが、さてそれがどういう訳であるか、長八にも説明することは出来なかつた。幸之助にも判らなかつた。いわゆる理外の理で、広い世界にはこうした不思議もあり得ると信じていた此の時代の人々としては、強しいてその説明を試みようとはしなかつたのである。なまじいに其の正体を見とどけようなどと企てると、黒沼伝兵衛のような奇禍に出逢わないとも限らない。触さわらぬ神たに崇たり無しで、好んでそんな事件にかかり合うには及ばないと云うのが、長八の意見であつた。

彼はその意見に基づいて伴の長三郎を戒いましめたが、今や幸之助に対しても同様の意見をほのめかして、若い侍の冒険めいた行動を暗に戒めると、幸之助もおとなしく聴いていた。幸之助が帰つたあとで、お北は父にささやいた。

「東青柳町にまた白い蝶々が出たそうですね」

「お前は立ち聴きをしていたのか」と、長八はすこしく機嫌を損じた。「立ち聴きなぞするのは良くないぞ」

お北は顔を赤くして黙ってしまった。

その翌夜は黒沼の逮夜たいやで、長八夫婦と長三郎は列席した。他にも十五、六人の客があったが、大抵の人は東青柳町の噂を聞き知っていた。そうして、それは切支丹きりしたんの魔法ではないかなどと説く者もあった。今夜の仏の死が奇怪な蝶に何かの關係を持つていられるしくも思われるので、遺族の手前、その噂をするのを憚はばかりながらも、奇を好む人情から何かとその話が繰り返された。父からきびしく叱られているのと、また二つには若年者じやくねんものの遠慮があるので、長三郎は終始だまっていたが、諸人のうわさ話を一々聞き洩らすまいとするように、彼は絶えずその耳を働かせていた。

それから半月余りは何事もなくて過ぎた。二月に入つていよいよ暖かい日がつづいて、ほんとうの蝶もやがて飛び出しそうな陽気になった。その十二日の午過ぎひるに、長三郎は父の使で牛込まで出て行つたが、先方で少しく暇取つて、帰る頃には此の頃の春の日ももう暮れかかつていた。江戸川橋の袂まで来かかると、彼は草履の緒を踏み切つた。

自分の家まではさして遠くもないのであるが、そのまま歩くのは不便であるので、長三郎は橋の欄干らんかんに身を寄せながら、懐紙かひしを小撚こよりにして鼻緒をすげ換えていると、耳の端はたで人の声がきこえた。それが何だか聞き覚えのあるように思われたので、長三郎は俯向

いている顔をあげると、二人の男が音羽の方向へむかつて、なにか話しながら通り過ぎるのであった。ひとりは屋敷の中間である。他のひとりは町人ふうの瘦形の男であった。どちらもうしろ姿を見ただけでは、それが何者であるかを知ることが出来なかった。その一刹那に長三郎はふと思ひ出した。

「あ、あの時の声だ」

黒沼伝兵衛の死を報告するために、暗やみを駆けてゆく途中で突きあたった男——その疑問の男の声は確かにそれであったことを思ひ出して、長三郎の胸は怪しく跳つた。

二人はもう行き過ぎた後であるので、それが中間の声か、町人の声か、その判断は出来なかつたが、ともかくも彼等のひとりが其の夜の男に相違ないと、彼は思った。しかも彼はあいにくに草履の鼻緒をすげているので、直ぐにその跡を尾けて行くことも出来なかつた。長三郎が焦れて舌打ちしている間に、二人は見返りもせずに橋を渡り過ぎた。

急いで鼻緒をすげてしまった頃には、二人のうしろ影はもう小半丁も遠くなっているのを、見失うまいと眼を配りながら、長三郎は足早に追って行った。音羽の大通りへ出て、九丁目の角へ来かかると、ひとりの女が人待ち顔にたたずんでいた。彼女は長三郎を待っていたらしく、その姿をみると小走りに寄つて来たので、長三郎は思わず立ちどまった。



女は火の番の娘お冬であった。

「先日は失礼をいたしました」と、お冬は小声で挨拶した。

そうして、うしろの横町を無言で指さした。その意味がわからないので、長三郎も無言でその指さす方角をながめると、横町の寺の門に立っている男と女のすがたが見えた。

まだ暮れ切らないので、ふたりの姿は遠目にも大かたは認められたが、男はかの黒沼幸之助で、女は自分の姉のお北であることを知った時に、長三郎は一種の不安を感じて無意識にふた足三足あるき出しながら、更に横町の二人を透かし視た。

幸之助と姉とは今頃どうして其処らに徘徊しているのであろう。途中で偶然に行きあつて何かの立ち話をしているのか。あるいは約束の上でそこに待ち合わせていたのか。前者ならば別に仔細もないが、後者ならば容易ならぬ事である。幸之助は黒沼家の婿養子となつて、いまだ祝言しゅうげんの式さえ挙げないが、お勝という定まった妻のある身の上である。その幸之助と自分の姉とが密会みっかいする——万一それが事実であつて、その噂が世間にきこえたならば、二人は一体どうなることだろう。いずれにしても一と騒動はまぬがれまい。それを考えながら、長三郎は暫く遠目に眺めていると、お冬は訴えるように又ささやいた。

「あのおふたりは、このごろ時々……」

「きょうばかりでは無いのか」と、長三郎はいよいよ不安らしく訊いた。

お冬はうなずいた。ゆうぐれの寒さが身にしみたように、長三郎はぞつとした。自分は中間と町人のあとを尾けて来たのであるが、長三郎はもうそんな事は忘れてしまったように猶も横町をながめていると、その思案の顔に鬢びんのおくれ毛のほつれかかって、ゆう風に軽くそよいでいるのを、お冬は心ありげに見つめていた。

目白の不動堂で暮れ六ツの鐘を撞つき出したので、それに驚かされたように、幸之助とお北の影は離れた。男を残してお北ひとり足早に引返して来るらしいので、姉に見付けられるのを恐れるように、長三郎もおなじく足早にここを立ち去った。

## 六

「考えると、不審のことが無いでもない」

長三郎は家うちへかえつてから又かんがえた。黒沼の娘お勝はまだ全快しないで、その後も引きつづいて枕まくらに就ついている。その見舞ながらに、姉のお北は殆ど毎日たずねて行く。勿

論、隣家でもあり、ふだんから特別に懇意にしているのであるから、父も母も長三郎も別に不思議とも思わなかつたのであるが、こうなると、お北が毎日の見舞もほかに意味があるらしく推量されないことも無い。

婿に來たとは云うものの、お勝が病氣のために、幸之助はまだ祝言の式を挙げていない。そこへ姉が毎日入り込んで、幸之助と親しくする。しかもお冬の訴えによれば、ふたりは時々目白坂下の寺門前で会合すると云う。それらの事情をあわせて考えると、一種の疑いがいよいよ色濃くなる。姉に限って、まさかにそんな事はと打ち消しながらも、長三郎は全然それを否定するわけには行かなくなつた。

さりとて、父や母にむかつて迂闊うかつにそれを口外することは出来ない。いずれにしても更に真偽を確かめる必要があると思つたので、長三郎はきよの発見についていつさい沈黙を守ることにした。お北もやがてあとから帰つて來た。その話によると、音羽の大通りまで買物に出たのだと云うことであつた。

音羽の通りへ買物に出たものが、横町の寺門前までわざわざ廻つて行く筈がない。そんな嘘をつく以上は、姉の行動はいよいよ怪しいと、長三郎は思つた。

それから二、三日の後である。長三郎が夕飯をすませてから、いつもの如くに夜学に出

ると、四、五間さきをゆく男のうしろ姿が隣家の黒沼幸之助であることを、薄月のひかりで認めた。彼はどこへ行くのであろう。又もや姉を誘い出して、かの寺門前で密みっかい会するのではあるまいかと思うと、長三郎はそのあとを尾つけてゆく気になった。彼は草履の音を忍ばせて、ひそかに幸之助の影を追ってゆくと、その影はかの横町の方角へはむかわずに、路ばたの狭い露路にはいった。

露路の奥には火の番の藤助の家がある。彼はその家をたずねるのか、それとも他の家をたずねるのか、長三郎は更に又新しい興味に駆られて、つづいて露路のなかへ踏み込んだ。先日一度たずねた事があるので、長三郎は先ず藤助の家のまえに忍び寄って内の様子を窺うと、故意か偶然か、行燈あんどうの火は消えて一面の闇である。その暗いなかで女の声がきこえた。

それがお冬の声でないことを知った時に、長三郎はまた不思議に思った。女の声は低かったが、それでも力がこもっているので、外で聴いている者の耳にも切れぎれに響いた。

「あなたのような不人情な人はない、覚えておいでなさいよ」

幸之助は何かなだめているらしかったが、その声はあまりに低いので聴き取れなかった。暫くして女の声がまた聞こえた。

「忌いです、いやです。……もういつまでも瞞だまされちやあいません。いいえ、いけません。あなたのような人は……。いいえ、忌いです。唯は置かないから、覚悟しておいでなさい。……わたしは死んでも構かまわない。……あなたもきつと殺してやるから……」

長三郎はおどろいた。その女はいったい何者で、幸之助になんの恨みを云っているのか。彼は息をつめて聴いていると女は嚇おどすように又云った。

「わたしの口ひとつで、あなたの命は無いと云う事は、かねて承知の筈はずじゃありませんか。……黒沼家へ養子に行ったのは、まあ仕方がないとしても……。隣りの娘とまで仲よくして……。いいえ、知っています」

幸之助は又もや何か云い訳をしているらしかつたが、やはり表までは洩れきこえなかつた。長三郎はすこしく焦しれて、縁に近いところまでひと足ふた足進み寄ろうとする時に、うす暗い蔭からその袂をひく者があつた。ぎよつとして見かえると、それはお冬であるらしかつた。

「およしなさい」と、女は小声で云つた。

それは果たしてお冬であつた。

不意に声をかけられて長三郎もやや躊躇ちゅうちゆしていると、暗い家のなかでは人の動くような

音がきこえた。お冬は再び長三郎の袖をつかんで、無理に引き戻すように桃の木のかげへ連れ込むと、何者かが縁さきへ出て来た。暗いなかでも見当が付いているらしく、直ぐに下駄を穿<sup>は</sup>いて表へ出てゆく姿を薄月に透かして視ると、それはすつきりとした瘦形の女であつた。この女が幸之助を恨み、幸之助を嚇<sup>おど</sup>していたのかと思ううちに、その姿は露路の外へ幽霊のように消えてしまった。

長三郎もお冬も無言でそれを見送っているうちに、やがて又静かに縁を降りて来る者があつた。それは幸之助で、なにか思案<sup>しあん</sup>しているような足取りで、力なげに表へ出て行くのを、長三郎は殆ど無意識に尾<sup>つ</sup>けて行こうとすると、お冬は又ひきとめた。

「およしなさい」

なぜ止めるのか、長三郎には判らなかつた。それを諭<sup>さと</sup>すように、お冬はささやいた。

「あの人たちは怖い人です」

なぜ怖<sup>おそ</sup>いのか、長三郎にはやはり判らなかつた。しかし、かの女が「わたしの口ひとつで、あなたの命は無い」などと云つたのを考えると、それには恐ろしい秘密がひそんでいらしくも想像された。

「なぜ怖<sup>おそ</sup>いのだ」と、長三郎は訊いた。

「なんだか怖い人です。わたしのお父さんとつもあの人たちに殺されたのかも知れませんが、お冬は声を忍ばせて、若い侍にすぎり付いた。

その一刹那に、又もや一つの影が突然にあらわれた。暗いなかでよくは判らなかつたが、猫のように縁の下から這い出して来たらしく、頬かむりをした町人ふうの男が足早に表へぬけ出して行つた。彼は、まったく猫のように素捷すばやかつた。

長三郎も意外であつたが、お冬も意外であつたらしく、身をすくめて長三郎にしがみ付いていた。家のなかは暗闇くらやみであるが、外には薄月がさしている。それに照らし出された男のうしろ姿は、このあいだ江戸川橋で出逢つた町人であるらしく思われたので、長三郎は又もや意外に感じた。と同時に、彼は殆ど無意識にお冬を突きのけて、その男のあとを追つて出た。

薄月のひかりにうかがうと、女は大通りを北にむかつて行く。幸之助はそのあとを追つてゆく。町人ふうの男は又そのあとを追つて行くらしい。まだ宵であるから、両側の町屋も店をあけていて人通りもまばらにある。それを憚はばかつて幸之助も直ぐに女に追いつがろうとはしない。男も相当の距離を取つて尾けて行くので、長三郎もその真似をするように、おなじく相当の距離を置いて尾行することにした。

女は途中から左に切れて、灯の無い横町へはいってゆくと、左右は農家の畑地である。そこまで来ると、幸之助は俄かに足を早めて女のうしろから追い付いた。その足音をもちろん知っていたのだろうが、女は別に逃げようとする様子もなく、しずかに振り向いて相手と何か話しているらしかった。

町人はそれを見て、身をかくすように畑のなかに俯伏したので、長三郎もまた其の真似をして畑のなかに俯伏していると、やがて女は幸之助を突き放してふた足三足あるき出した。幸之助は追いかけて、女の襟に手をかけた。引き倒そうとするのか、喉のどでも絞めようとするのか、男と女は無言で挑いどみ合っていた。

俯伏していた町人は畑のなから飛び出して、飛鳥のごとくに駈け寄ると、それに驚かされて二つの影はたちまち離れた。女はあわてて逃げ去ろうとするのを、町人は駈け寄つて押さえようとすると、幸之助は又それをさえぎるように立ち塞がった。男ふたりが互いに争っているあいだに、女は一目散に逃げ出した。

女はともあれ、眼のまえに争っている男ふたりをどう処置していいのか、長三郎も当座の分別ぶんべつに迷った。本来ならば幸之助に加勢するのが当然であるが、今の場合、幸之助を助けるか町人を助けるか、どちらにするのが正しいか、長三郎にも見当が付かなかった。



彼はいったん立ち上がりながらも、いたずらに息を呑んでその成り行きを眺めているうちに、町人は草履ぞうりをすべらせて小膝を突いた。幸之助はそれを突き倒して逃げ出した。男はすぐに跳ね起きて、そのあとを追ってゆくと、幸之助は畑のなかへ飛び込んで、路えらを扱えらばずに逃げてゆく。追う者、追われる者、その姿は櫻けやきの木立こたちのかけに隠れてしまった。

何がどうしたのか、長三郎にはちつとも判らなかつた。彼はもうその跡を尾けてゆく元気もなく唯ぼんやりと突つ立っていたが、さつきからの行動をみると、かの町人は唯者ではない。おそらく八丁堀同心の手に付いている岡つ引のたぐいであろうと想像された。かの女と幸之助とのあいだに何かの秘密がひそんでいることも、さつきの対話でうすうす想像された。それらを結び付けて考えると、彼等是一種の重罪を犯して、岡つ引に付け狙われているのではあるまいか。

相手の女は何者であるか知らないが、幸之助は隣家に住んでいて、朝夕に顔を見あわせている仲である。それが重罪人であろうとは意外であるばかりか、自分の姉がその重罪人と親しくしているらしい事を考えると、長三郎はあたりが俄かに暗くなつたように感じられた。彼はもう夜学に行く気にもなれなくなつて、その儘わが家へ引つ返した。

彼は今夜の出来事を父にも母にも話さなかつた。父には内々で話して置きたいと思つた

のであるが、何分にも広くない家であるので、万一それを姉にでも立ち聴きされては困ると思つたので、その晩は黙つて寝てしまつた。

夜のあけるのを待ちかねて、彼は黒沼家の門前を掃いている下女のお安に聞きただすと、幸之助はゆうべ帰宅しないと云うのである。彼はついに岡つ引の手に捕われたのか、それとも逃げ延びて何処へか身を隠したのか、いずれにしても其の儘では済むまいと思われた。父の長八は当番で登城した。長三郎はいつもの通りに剣術の稽古に行つて、ひる頃に帰つて来ると、母のお由は午飯ひるめしを食いながら話した。

「おとなりの幸之助さんはゆうべから帰らないそうだね」

「どうしたのでしょうか」と、長三郎はそらとぼけて訊きいた。

「お友達と一緒に遊びにでも行つたのかも知れない」と、お由は笑いながら云つた。「こつちへ来てはまだ昨今だけれど、京橋の方にはお友達が随分あるようだからね。なにしろ御納屋おなやの人たちには道楽者が多いと云うから」

「お婿むこに来て、まだ一と月にもならないのに、夜遊びなんぞしては悪いでしょう」

「悪いとも……」と、お由はうなずいた。「けれども、お婿と云つても相手のお勝さんがあの通りだからね。きつとお友達にでも誘われて、どこへか行つたのだらうよ」

姉のお北も、妹のお年も、そばで一緒に箸をとっているので、長三郎はこの対話のあいだに姉の顔をぬすみ視ると、気のせいか、お北の顔色はやや蒼白く見られた。

その日の夕方に、お北もゆくえ不明になった。

## 七

「きようはお天気で好うござんしたね」と、二十四、五の小粋な女房が云った。

「むむ。初<sup>はつ</sup>午も二の午も大あたりだ。おれも朝湯の帰りに覗いて来たが、朝からお稲荷

さまは大繁昌だ」と、三十二、三の亭主が答えた。

「それじゃあ、わたしも早くお参りをして、お神酒<sup>みき</sup>とお供え物をあげて来ましょう」

女房は帯をしめ直して、表へ出る支度に取りかかった。この夫婦は神田の三河町に住む岡つ引の吉五郎と、その女房のお国である。女中に神酒と供え物を持たせて、お国が表へ出てゆくと、それと入れちがいに、裏口から一人の男が顔を出した。

「親分。内ですかえ」

取次ぎの子分が居合わせないで、吉五郎は長火鉢の前から声をかけた。

「留じやあねえか。まあ、あがれ」

「お早ようございます」

手先の留吉はあがつて来た。

「誰もいねえから火鉢は出せねえ。ずっとこつちへ来てくれ」と、吉五郎は相手を長火鉢の向うに坐らせて、直ぐに小声で話し出した。「どうだ。例の件は……」

「面目がありません、このあいだの晩はどじを組んでしまつて……」と、留吉は小鬢こびんをかいた。「だが、親分。もう大抵のところは見当が付きましたよ。お尋ね者のお亀はお近と名を変えて、音羽の佐藤孫四郎という旗本屋敷に巢を作っているんです」

「佐藤孫四郎……。小ツ旗本だろうな」

「と云つても、四百石取りで……。三年ばかり長崎へお役に出ている、去年の秋に帰つて来たんです。お亀のお近はそのあとから付いて来て、その屋敷へはいり込んだと云うことです」

「だれから訊いた」

「屋敷の中間にかまをかけて聞き出したんです。自分にうしろ暗いことがあるからでしょうが、中間なんぞには時々小遣いぐらい呉れるらしいので、みんなの評判は悪くないよ

うです」と、留吉はいったん笑いながら、又俄かに眉をよせた。「そこまでは判っているんだが、それから先きがまだどうも判らねえ。お近には内証ないしよの男がある。それが音羽の御賄屋敷の黒沼という家へ、このごろ婿に來た幸之助という若い奴らしいんですがね」

「幸之助の実家はどこだ」

「白魚河岸しろうおがしの吉田という御納屋おなやの次男です」

「そこで、そのお近や幸之助と、例の蝶々と、なにか係り合があると云うのか」と、吉五郎はまた訊いた。

「さあ、そこが難題でね」と、留吉は再び小鬢をかいた。「わつしの本役は蝶々の一件で、お近や幸之助の方はまあ枝葉えだはのような物なんです、不意にこんな掘出し物をする、ついでにそつちが面白くなって……。今のところじゃあ、あのふたりと蝶々の一件とが結び付いているような、離れているような……。親分はどう鑑定しますね」

「おれにもまだ判断が付かねえ」と、吉五郎はしずかに煙草をくゆらせた。「それから火の番の藤助というのはどうした。これも帰らねえか」

「帰って来ません。こいつは確かに蝶々に係り合があると睨んでいるんですが……。なにしろ忌いやにこぐらかつているんでね」

「どうで探索物はこぐらかつているに決まってるから、まあ落ちついて考えて見なけりやあいけねえ」

吉五郎はつづけて煙草を喫つた。留吉も煙管筒きせるづつを取り出した。親分と子分は暫く無言で睨み合っていると、その考えごとの邪魔をするように、町内の午祭りの太鼓の音が賑やかにきこえた。

「幸之助はその晩から自分の家うちへ帰らねえのか」と、吉五郎は煙管をはたきながら訊いた。「これも帰つて来ないようです」と、留吉は答えた。「わつしに捕まりそうになつたので、どこへか姿を隠したと見えますよ」

「だが、幸之助はともかくも侍だ。火の番の親爺とは身分が違うのだから、姿を隠したままで済む訳のものじゃあねえ。そんな事をすれば家断絶だ。黒沼くろぬまという家うちでも飛んだ婿を貰つたものだな。ひよつとすると、白魚河岸の実家に忍んでいるんじゃないやあねえか」

「わつしもそう思つたので、けさも出がけにそつと覗いて来たんですが、どうもそんな様子も見えないようでしたが……。しかしまあ、よく気を付けましょう」

「しつかり頼むぞ」

「ようがす」

「手が足りなければ、誰か貸してやろうか」

「さあ」と、留吉はかんがえた。「大勢であらすと却っていけねえかも知れません。もう少し一騎討ちでやってみましょう」

他人ひとに功名を奪われたくないような口振りで、留吉は早々に出て行った。吉五郎は又もや煙管を取り上げて、しずかに煙りを吹いていたが、やがて何をかんがえたか、忙がしうに煙管をはたいて立ちあがると、あたかも表の格子こうしのあく音がして、お国と女中が帰つて来た。

「おい。着物を出してくれ」

「どつかへ行くの」と、お国は訊いた。

「むむ。留が今来たが、あいつ一人には任せて置かれねえ事が出来た。おれもちよいと出て来る」

吉五郎も早々に着物を着かえて、表へ出て行った。商売で出ると云うのであるから、女房ももう其の行く先きを訊こうとはしなかった。

その日の午後である。

旧暦二月のなかばの春の空は薄むらさきに霞んで、駿河町すのがちようからも富士のすがたは見え

なかつた。その日本橋の魚河岸から向う鉢巻の若い男が足早に威勢よく出て来た。男は問屋の若い衆しゅであるらしく、大きい鯛を青籠あおかごに入れて、あたまの上に載せていた。彼は人ごみの間をくぐり抜けて、日本橋を南へむかつて急いで来たが、長い橋のまん中ごろまで渡つたかと思うときに、彼はどうしたのか俄かに足を停めた。と見る間もなく、彼は頭の魚籠びくを小脇に引つかかえて、欄干から川のなかへざんぶと飛び込んだので、往来の人々はおどろいた。

威勢のいい魚河岸の若い衆が、なんで突然日本橋から身を投げたのか。仔細を知らない人々は唯あれあれと騒いでいたが、そのなかで唯ひとり、その仔細を大抵推量したのは神田三河町の吉五郎であつた。彼は何処をどう歩いてたのか知らないが、あたかもここへ来かかつて此の椿事ちんじを目撃したのである。

若い衆が川へ飛び込んだのは、鯛を持つていたが為であろうと、吉五郎は思った。徳川家には御納屋という役人がある。それは將軍の食膳のぼに上せるべき魚類、野菜類を取り扱う役で、魚類だけでも鯛の御納屋、白魚の御納屋、鮎の御納屋などと、皆それぞれの専門がある。この御納屋の特権は、良い魚類とみれば勝手に徴ちようはつ発を許されていることである。御納屋の役人が或る魚を指さして、「これは御用だぞ」と云つたが最後、忌いやでも応でもそ



の魚を納めなければならぬ。その代金も呉れるか呉れないか判らない。唯取りにされてしまう場合も往々ある。そんなわけであるから、河岸かしの人間は御納屋を恐れて大いに警戒しているのである。

かの若い衆は、どこかの註文で大きい鯛を持ち出した途中、あいにく日本橋のまん中で鯛の御納屋に出逢ったのである。これを取られては大変だと思ったのか、あるいは権力をかさ笠に被きて強奪されるのを口惜くやしいと思つたのか、いずれにしても血気の若い衆は一尾の鯛を御納屋の手へ渡すまいとして、魚籠びくと共に川中へ飛び込んだのであろう。河岸の育ちであるから泳ぎも知つていゝであらう。殊に白昼のことであるから、溺死する氣づかいもあるまいと、吉五郎は多寡をくくつてさほどに驚きもしなかつた。

彼は身を投げた若い衆よりも、身を投げさせた相手に眼をつけると、それは四十前後の人柄のいい侍で、これも身投げの仔細をおおかたは察したらしく、微笑を含みながら見返りもせずに行き過ぎた。

吉五郎は引つ返して、その侍のあとを追つた。橋を渡り越えて室町むろまちのあたりまで来た時に、彼は小声で呼びかけた。

「もし、もし、今井の旦那……」

呼ばれて立ち停まつた侍の前に、吉五郎は小腰をかがめて丁寧えしやくに会釈した。

「旦那さま。御無沙汰をいたして居ります」

「三河町の吉五郎か」と、侍は又微笑した。「今のを見たか。おれ達はどうも憎まれ役で困るよ」

侍は鯛の御納屋に勤めている今井理右衛門であった。自分が何をしたという訳でもないが、自分のために若い衆が身を投げたのを、岡っ引の吉五郎に見付けられたかと思うと、彼はやや当惑に感じたのであろう、憎まれ役などと云い訳がましく云っているのを、吉五郎は軽く受け流してすぐに本題に入った。

「途中でこんなことをお尋ね申すのも失礼でございますが、あなたは吉田の旦那と御懇意でございますね」

「吉田……。白魚河岸か」

「左様でございます。それで少々伺いたいのでございますが、この吉田さんは音羽の佐藤さんという旗本を御存じでございますでしょうか」

「音羽の佐藤……」

「昨年の秋ごろ、長崎からお帰りになりましたかたで……」

「むむ。佐藤孫四郎どのか。わたしもちよつと識っているが、吉田はよほど懇意にしているらしい。吉田の家内はなんでも佐藤の親類だとか云うことだから……」

「はあ、御親類でございますか。それでは御懇意の筈で……」

「なんだ。その佐藤に何か用でもあるのか」と、理右衛門は相手の顔をながめながら訊いた。

吉五郎が唯の人間でないことを知っているだけに、彼は幾分の好奇心をそそのかされたらしくも見えた。

「いえ、別に用というほどの事でもございませんが……」と、吉五郎はあいまいに答えた。

「先日あのお屋敷の前を通りましたら、吉田さんの御子息をお見かけ申しましたので……」

「次男の方だろう。あれは御賄組の黒沼という家へ急養子に行ったそうだから……」

「わたくしもそんなお噂を伺いました。いや、どうもお急ぎのところをお引き留め申しまして相済みませんでした。では、これで御免ください」

ふたたび丁寧えしやくに会釈して立ち去る吉五郎のうしろ姿を、理右衛門は不審そうに見送っていた。往來なかで人を呼びとめて、単にそれだけのことを訊きいて行くのは少しくおかしいと思つたからであろう。しかも吉五郎に取つては、吉田の家と佐藤の屋敷との關係を聞

き出しただけでも、一つの手がかりであった。佐藤の屋敷の前で吉田の俵のすがたを見たなどと云うのは、もとより当座の出たらめに過ぎないのである。

吉田と佐藤とが親戚の間柄である以上、吉田の次男幸之助がその屋敷へ出入りするに不思議はない。そうして、その屋敷にいるお近という女と親しくなったと云うのも、世にありそうなことである。唯その幸之助が留吉の虜とりことならずに、どこへ姿を隠したか、それを詮議しなければならぬと吉五郎は思った。

彼はそれから京橋へ足を向けて、白魚河岸の吉田の家をたずねた。勿論、玄関から正面に案内を求めるわけには行かないので、彼は気長にそこらを徘徊して、その家から出て来る中間や女中らを待ち受けて、いろいろにかまを掛けて探索したが、幸之助は実家にひそんでいないいらしかった。

「燈台下もしくら暗しで、やっぱり佐藤の屋敷に忍んでいるかも知れねえ」

吉五郎はいったん神田の家へ帰って、ゆう飯を食って更に出直そうとするところへ、留吉が忙がしそうにはいつて来た。

「親分、出かけるんですかえ」

「むむ。今夜はおれが音羽へ出かけて、張り込んでみようと思うのだ」

「それじゃあ行き違いにならねえで良かった。実は又ひとつ事件がしゅったい出しゅ来たいしてね」と、留吉は眉をひそめた。

「黒沼の家の娘うちが死んだそうで……」

「家付き娘だな」

「そうです。お勝といつて、ことし十八になります。親父が死んで、幸之助を急養子にしたんですが、お勝は病気で寝ているので、祝言も延びのびになっているうちに、幸之助は家出をして帰らない。それがもとで、お勝は自害したそうです」

「自害したのか」と、吉五郎も少しく驚いた。

「短刀だか懐剣だか知らねえが、なにしろ寢床の上に起き直つて、喉のどを突いたんだと云うことです」と、云いかけて留吉は声を低めた。「それからまだおかしいことは、黒沼のとなりの瓜生うちという家では、お北という娘が家出をしたそうです」

「幸之助が家出をする。女房になる筈のお勝という女が自害する。又その隣りの娘が家出をする。それからそれへと悪くごたつくな。それで、その女たちは、なぜ自害したのか、なぜ家出をしたのか。その訳はわからねえのか」

「なにぶん武家の組屋敷のなかで出来た騒動だから、くわしい事はとても判らねえ。これ

だけのことを探り出すのでも容易じやありませんでしたよ」

「そうだろうな」と、吉五郎もうなずいた。「そう聞いちやあ猶さら打っっちゃって置かれねえ。御苦労だが、もう一度行つてくれ」

ふたりが神田を出る頃には、ようやく長くなつたという此の頃の日も暮れていた。しかも夕方から俄かに陰くもつて、雨を含んだようななま暖かい南風みなみが吹き出した。

「忌いやな晩ですな」

「忌な空だな。降られるかも知れねえ」

暗い空を仰ぎながら、ふたりは音羽の方角へ急いでゆくと、途中から風はいよいよ強くなつた。

「黒沼伝兵衛という侍が死んでいたと云うのは、どの辺だ」

「そこの寺の前ですよ」

留吉が指さす方に或る物を見いだして、吉五郎は口のうちで叫んだ。

「あ、蝶々だ」

「むむ。蝶々だ」

ふたりは白い影を追うようにあわてて駆け出した。

闇にひらめく蝶のかけを追いながら、吉五郎と留吉は先きを争って駈け出したが、吉五郎の方が一と足早かった。彼はふところから四つ折りの鼻紙を取り出して、蝶を目がけてはたと打つと、白い影はそのまま消え失せてしまった。

「たしかに手応えはあつたのだが……」と、吉五郎はそこらを透かして見まわしたが、提灯を持たない彼は、暗い地上に何物をも見いだすことが出来なかつた。

「そこらへ行つて蠟燭を買つて来ましょう」と、留吉は土地の勝手を知っていると見えて、すぐにまた駈け出した。

寺門前には小さい商人店あきんどみせが五、六軒ならんでいる。表の戸はもう卸おろしてあつたが、戸のあいだから灯のひかりが洩れているので、留吉はその一軒の荒物屋の戸を叩いて蠟燭を買つた。裸蠟燭では風に吹き消される虞おそれがあるので、小さい提灯を借りて来た。

その提灯のひかりを頼りに、ふたりはそこらの地面を照らして見たが、蝶らしい物の白い影はどこにも見あたらなかつた。吉五郎は舌打ちした。

「仕様がねえ。風が強いので吹き飛ばされたかな。まさかに消えてなくなった訳でもあるめえ」

と云う時に、留吉は声をあげた。

「や、飛んでいる。あすこに……」

白い蝶は、三、四間はな距れた所に飛んでいるのである。それを見て、吉五郎はまた舌打ちした。

「畜生。ひとを玩具おもちゃにしやあがる」

ふたりは直ぐに駈け寄ると、蝶の影は消えるように見えなくなった。

留吉は提灯をふりまわして、しきりにそこらを照らして見たが、それらしい物の影もないので、彼は焦じれて無闇に駈け廻った。吉五郎も鼻ふくろうのように眼を見張って、暗いなかを覗いて歩いたが、それもやはり無効であった。

往來の絶えた寺門前の闇のなかに、大の男ふたりが一生懸命駈け廻って蝶を追っているのは、どうしても狐に化かされたような図である。しかも今の彼等はそんなことを考えている暇はなかった。

「ほんとうに人を馬鹿にしていやあがる。忌々いまいましい奴だな」と、留吉は息をつきながら



云った。

吉五郎も立ち停まって溜め息をついた。

いかに焦<sup>じ</sup>れても、燥<sup>あせ</sup>つても、怪しい蝶はもうその影を見せないのである。ふたりはあきらめて顔を見合わせた。

「親分。どうしましょう」

「仕方がねえ。又どつかで見付かるだろう」

「これからどうします」

「むむ。おれの考えじゃあ……」と、云いかけて、吉五郎は俄かに見返った。「留。あれを取っ捉まえろ」

見ると、うしろの寺の生垣<sup>いけがき</sup>の下に、犬か猫のようにうずくまっている小さい影がある。留吉は持っている提灯を親分に渡して、直ぐにその影を捕えに行った。影は飛び起きて、暗い坂の上へ逃げて行くこうとするのを、留吉は飛びかかって押さえ付けた。吉五郎がさしつける提灯のひかりに覗いて見て、留吉はうなずいた。

「むむ。てめえか。このあいだからどうもおかしい奴だと思っていたのだ」

「おめえはその女を識っているのか」

「こいつは火の番の藤助のむすめで、お冬というんですよ」

「火の番の娘か」と、吉五郎もうなずいた。「おれもそいつを調べてみようと思っていたのだ」

「自身番へ連れて行きましようか」

「いや、自身番なんぞへ連れて行くと、人の目に立っていけねえ。ここでおれが調べるから、おめえは提灯を持って往來を見張っている」

吉五郎はお冬の腕をつかんで、寺の門前へ引き摺って行ったが、正面は風があたるので、横手の生垣をうしろにしてしゃがんだ。

「おまえは今頃なんでこんな所に忍んでいたのだ」

お冬は黙っていた。

「おれ達は十手じってを持っている人間だ。おれ達の前で物を隠すと為にならねえぞ」と、吉五郎は嚇すように云い聞かせた。「そこでお前の親父はどうした。まだ帰らねえのか」

「はい」と、お冬は微かすかに答えた。

「ほんとうに帰らねえか。あすこの佐藤という旗本屋敷に隠されているんじゃないか」  
お冬はやはり黙っていた。

「お前はそれを知っている筈だ。おまえの親父は訳があつて、当分は佐藤の屋敷に隠れているから心配するなど、お近という女から云い聞かされてる筈だが……。それでも知らねえと強情ごうじょうを張るか。又そのお近という女は、ときどきにお前の家へ忍んで来て、黒沼の婿の幸之助と逢あひびき曳ひをしている筈だが……。それでもお前は強情を張るか」

お冬はまだなんにも云わないので、吉五郎はほほえみながらその肩を軽く叩いた。

「おまえは年の割に、なかなかしつかり者だな。と云つて、褒めてばかりはいられねえ。あんまり強情を張っていると、おれも少しは嚇かさなけりやあならねえ。おまえは一体、なんでここへ来ていたんだよ。おまえにも色男でもあつて、今夜ここへ逢いに来ていたのか」

お冬はあくまでも強情に口を閉じていた。

「それとも俺たちの後を尾つけて来て、何かの立ち聴きでもしようとしたのか。え、おい。なぜいつまでも黙っているんだよ」と、吉五郎は再びその肩を軽く叩いた。

前にも云う通り、門の正面には南風が強く吹き付けるので、吉五郎は横手の生垣をうしろにしてならんでいたのであるが、その時、その生垣の杉のあいだから一つの手があらわれて、暗いなかで吉五郎の襟髪を掴んだかと思うと、力任せに強く引いた。不意に掴まれ

たのと、その引く力が可なりに強かつたのとで、吉五郎は思わず尻餅をついて仰向けに倒れると、その隙をみて忽ち立ちあがったお冬は、いわゆる脱兎だつとの勢いで駈け出した。

それに気がついて、留吉があわてて駈け寄ると、お冬は手早くその提灯を叩き落とした。かれは灯の見える大通りへ出るのを避けて、暗い目白坂を駈けのぼって行くのである。

それを追うよりも、まず親分を救わなければならないと思ったので、留吉はそのまま門前へ駈けつけると、吉五郎は倒れながら相手の腕を掴んでいた。

「留、早くそいつを取つかまえろ」

留吉はこころえて、これも生垣越しに相手の腕をつかんで引き出そうとすると、相手は出まいと争ううちに、生垣の細い杉は二、三本ばらばらと折れて、内の人間は表へころげ出した。彼は必死にいどみ合ったが、捕り方ふたりの為に組み敷かれて、更に早縄をかけられて、門前に引き据えられた。

「なにしろ暗くつちやあ、面が見えねえ」

今度は寺の門を叩いて、提灯の火を借りることにした。その火に照らされた男の顔を覗いて、留吉はうなずいた。

「俺もそんな事じゃあねえかと思つた。親分。こいつは火の番の藤助ですよ」

「そうか」と、吉五郎もうなずいた。「こんな所で調べていると、又どんな邪魔がはいらねえとも限らねえ。やっぱり自身番へ連れて行こう」

云いも終わらないうちに、果たして邪魔がはいった。おそらく門内にひそんでいたであろう。ひとりの覆面の男が突然に跳り出て、まず留吉の提灯をばさりと斬り落とした。

「光る物を持つているぞ。気をつけろ」

留吉に注意しながら、吉五郎はふところから十手を出すと、留吉も十手を取って身構えた。覆面の男は無言で斬ってかかった。それが侍であると覚ったので、ふたりも油断は出来ない。縄付きの藤助をその儘にして、激しく斬って来る相手の刀の下を抜けつくぐりつ闘っていると、男はなんと思ったか、俄かに刃を引いて暗い坂の方角へ一散に逃げ去った。

ふたりはつづいて追おうとしたが、逃げてしまった相手を追うよりも、既に捕えた相手を逃がさない工夫が肝腎であると思つたので、ふたりは云い合わせたように足を停めた。彼等は再び門前へ引返して来ると、暗いなかに藤助の姿は見えないらしかった。留吉は寺内へ駆け込んで更に提灯を借りて来ると、果たしてそこらに藤助の姿は見えなかった。

覆面の男は藤助を救うがために斬って出たのであろう。その闘いのあいだに彼は姿を隠

したのであろう。しかも藤助は縄付きであるから、自由に遠く走ることには出来ない筈である。あるいは墓場に忍んでいるかも知れないと云うので、留吉が先きに立って石塔のあいだを縫ってゆくと、白い蝶が又ひらひらとその眼さきを掠めて飛んだ。

「又来やあがつた」

ふたりは怪しい蝶の行くえを追って行くとき、留吉は足許あしもとに倒れている石塔につまづいて横倒しにどつと倒れた。

「あぶねえぞ」と、吉五郎は声をかけたが、留吉は直ぐに返事をしなかった。

留吉は倒れるはずみに、石塔の台石などで脾腹ひばらを打ったらしい。さすがに気を失うほどでも無かったが、彼は低い息をついているばかりで容易に起き上がられそうもないので、吉五郎は手を貸して扶たすけ起こすと、留吉はぐたりとしていた。

「留。どうした。しつかりしろ」

こうなると、蝶の詮議は二の次にして、子分を介抱しなければならぬので、吉五郎は留吉を抱くようにして墓場を出た。寺の玄関へ廻って案内を乞うと、奥から納所なっしょが出て来た。留吉はさつき提灯を借りに行ったので、納所もその顔を識っていた。

「その人がどうかしたのですか」

「そこで転んで怪我をしたらしいんです。済みませんが、燈火あかりを拝借したいので……」

留吉を玄関に横たえて、納所が持つて来た灯のひかりに照らして見ると、留吉は脾腹を打ったほかに、左の手も痛めているらしかった。吉五郎は自分の身許を明かして、直ぐに医者を呼んで貰いたいと頼むと、納所は異議なく承知して、寺男を表へ出してやった。

吉五郎らの身許を知ったので、寺でも疎略そりやくには扱わなかった。住職もやがて奥から出て来た。彼は納所らに指図して、書院めいた座敷へ怪我人を運び込ませた。

「夜中お騒がせ申して、相済みません」と、吉五郎はあらためて住職に挨拶した。

「いや、どう致しまして……」と、住職は留吉の方を見返りながら、これも丁寧えしやくに会釈えしやくした。「それにしても、夜中どうしてこの墓地へおはいりなされた。なにか御用でござるか」

住職の物云いは穩かであるが、その眼の怪しく光っているのを、吉五郎は見逃がさなかつた。

初対面の住職はもう四十五、六歳であろう。色の蒼白い瘦形の一種の威厳を具えたように見える人柄であった。彼は何事も知らないものであろうか、あるいは何かの秘密を知っているものであろうか。それを確かめない以上は、迂闊うかつな返事も出来ないので、吉五郎は用心

しながら答えた。

「実はこの火の番の藤助という者の行くえを探して居りますと、今夜こちらの御門前でその姿を見付けましたので、取り押さえて一旦は縄をかけたのですが、又どこへか逃がしてしまいましたので、それを探しにお墓場の方へまいります途中、なにぶんにも暗いので、足許に倒れている石塔につまづきまして……」

「左様でござりましたか。火の番の藤助はわたくしも識って居りますが、あなた方のお繩にかかりながら又それを抜けて逃げるとは、見掛けによらない大胆者でござるな。して、藤助に何か御詮議の筋があるのでござりますか」

「藤助は先月以来、行くえが知れないのでございます」

「それはわたくしも聴いて居りますが……。では、藤助は何かうしろ暗いことでもあつて、すがたを隠しているのをござりますな」

「そらとぼけてそんなことを云うのか、或いはまったく知らないのか。吉五郎はその判断に苦しみながらあいまいに答えた。

「うしろ暗いことがあるか無いか、それは調べてみなければ判りませんが、いずれにしてもかけおちもの駈落者は一応の詮議を致さなければなりませんので……。まして世間へは駈け落ちと



見せかけて、我が家の近所にうろ付いているなどは、潔白な人間のおこないでは無いように思われますので、ともかくも取り押さえようと致しますと、案外に手向いを致しますので、よんどころなくお縄をかけたのでございます」

「ごもつともで……。そこで、その藤助がこの寺の墓地へ逃げ隠れたと仰しやるのですかと、住職はまた訊きいた。

「今も申す通り、なにぶん暗いので確かなことは判りませんが、もしやと思ひまして……」  
 「では、確かにこの寺内へ逃げ込んだというお見込みが付いたわけでも無いのですな」

このとき納所が茶と菓子を運んで来たので、それを機しほに住職は又あらためて会釈した。

「甚だ勝手でござりますが、実は二、三日前から風邪で引き籠こもつて居りますので、わたくしはこれで御免を蒙ります。どうぞゆるゆると御休息を……」

「御病ちゆう御迷惑をかけて恐れ入ります、御遠慮なくお休みください」

たがいに挨拶して、住職は納所と共に立ちあがった。そのうしろ姿を見送りながら、吉五郎は何か思案していると、今まで無言でころがっていた留吉は自由にならない体を少しく起こして、小声で話しかけた。

「親分、あの和尚おしょうは怪しゆうござんすね」

「おめえも見たか」

「さつきから寝ころびながら、あいつの顔色をうかがっていたんですが、あの和尚、なにか因縁いんねんがありそうですぜ」

「おれの思う壺にだんだん嵌はまつて来る」と、吉五郎はほほえんだ。「全くあの和尚は唯の鼠じゃあねえ」

足音がきこえたので、ふたりは急に口をつぐむと、納所が医者を案内して来た。

## 九

岡つ引の吉五郎と、その子分の留吉は着々失敗して先ず第一に目的の白い蝶を見うしない、次にお冬を取り逃がし、次に火の番の藤助を取り逃がし、更に覆面の曲者を取り逃がし、最後に留吉は墓場でころんで負傷した。一夜のうちにこれほどの失敗が重なったのは、彼等にとってよくよくの悪日あくびとも云うべきであった。

しかも不幸は彼等の上ばかりでなく、この事件に重大の関係を有する御賄組の人々の上にも、種々の不幸が打ち続いたのであった。黒沼の婿の幸之助がゆくえ不明になったかと

思うと、つづいて瓜生の家でも娘のお北が姿をかくした。幸之助の家出、お北の家出、両家ともに努めて秘密にしていたのであるが、女中らの口からでも洩れたと見えて、早くも組じゆうに知れ渡つてしまった。

取り分けて、人々をおどろかしたのは、黒沼の娘お勝の死であつた。前にも云う通り、お勝は先月以来引きつづいて病床に横たわつていて、急養子の幸之助とは名ばかりの夫婦であつたが、その幸之助が家出すると又その跡を追うように隣家のお北が家出したことを知つた時に、お勝は枕をつかんで泣いた。

「口惜しい」

そのひと言に深い意味のこもっていることは、母のお富にもよく察せられたが、まだ確かな証拠を握つたわけでもないのです、表立つて瓜生へ掛け合いにも行かれず、さしあたりいい加減に娘をなだめて置くと、お勝は母や女中の隙をみて、床の上に起き直つて剃刀かみそりで喉のどを突き切つた。お富がそれを発見した時には、娘はもう此の世の人ではなかつた。別に書置らしい物も残していなかつたが、その自害の原因が「口惜しい」の一句に尽くされているのは疑うまでもないので、お富も身をふるわせて口惜しがつた。

まだ正式の祝言は済ませないでも、幸之助がお勝の婿であることは、組じゆうでも認め

ている。世間でも認めている。その幸之助と駈け落ちをしたとあれば、お北は明らかに不義密通である。確かな証拠を握り次第、お富は瓜生の親たちにも掛け合い、組頭にも訴えて、娘のかたき討ちをしなければならぬと決心した。

お富が決心するまでもなく、瓜生の家でもそれに対して相当の覚悟をしなければならなかった。長八は妻のお由と伴の長三郎を自分の居間に呼びあつめてささやいた。

「どうも飛んだ事になつてしまった。幸之助の家出、お北の家出、それだけならば又なんとか内済にする法もあるが、それがためにお勝までが自害したとあつては、事が面倒になる。黒沼の方ではどういう処置を取るか知らないが、どうも無事には済むまいと思われる。おれ達もその覚悟をしなければなるまいぞ」

「その覚悟と申しますと……」と、お由は不安らしく訊いた。

「おれも侍の端くれだ。こうなつたら仕方がない、一日も早くお北のありかを探し出して、手打ちにして……。その首を持つて黒沼の家へ詫びに行かなければ……。さもないと家事不取締りの廉で、おれの身分にも拘わるからな」と、長八は溜め息まじりで云った。

比較的さむらいかたぎに武士気質の薄い御賄組に籍を置いていても、瓜生長八、ともかくも大小をたばさむ以上、こういう場合にはやはり武士らしい覚悟を決めなければならなかった。

「それで、黒沼の家はどうなるでしょう」と、お由は又訊きいた。

「今度こそは断絶だろうな」と、長八は再び溜め息をついた。「先月の時にも表向きにすればむずかしかつたのだが、伝兵衛急病ということにして先ず繋ぎ留めたのだ。それは組頭も知っている。その矢さきへ又今度の一件だ。養子は家出する、家付きの娘は自害する。それではどうにも仕様があるまい」

「いつそ先月の時に、おとなりの家が潰れてしまつたら、こんな事にもならなかつたのでしょうか……」と、お由は愚痴らしく云つた。

「今更そんなことを云つても仕方がない。なにしろ娘が悪いのだ。幸之助も悪いが、お北も悪い。つまりはりようせいばい両成敗で型を付けるよりほかないのだ。おれはもう覚悟している。おまえ達もそのつもりでいろ」

お由は無言で眼を拭いた。長三郎も黙つて聴いていると、父はやがて倅の方へ向き直つた。

「今も云い聞かせた通りの次第だが、おれは勤めのある身の上だ。御用をよそにして娘のゆくえを尋ね歩いてはいられない。おまえは部屋住みだ。これから江戸じゆうを毎日探し歩いて、姉の隠れ場所を見つけて来い。途中で出逢つたらば、無理に連れて帰つて来い」

いかにこの時代でも、十五歳の小件に対してこんな役目を云いつけるのは、少しく無理なようにも思われたが、これは迂闊うかつに他人にも頼まれない用向きであるから、長八もわが子に頼むよりほかはなかつたのである。その事情を察しているので、長三郎も断わること出来なかつた。

「承知しました」

「けれども、おまえ……」と、お由は我が子に注意するように云つた。「家の姉さんの家出したのはほかに仔細のあることで、おとなりの幸之助さんとは係り合いが無いのかも知れないからね。そのつもりで、むやみに手暴てあらしな事をしちやあいけませんよ」

「いや、それは未練だ」と、長八は叱るように云つた。「お北が幸之助と裏口で立ち話をしているのを、妹も二、三度見たことがあると云うのだ。お秋も今まで隠していたが、これも二人の立ち話を時々に見たと云う。してみれば、証拠は十分だ。長三郎、決して容赦やするなよ。おまえは年の割合には剣術も上達している。万一、幸之助が邪魔をして、刀でも抜いて嚇おどかすようなことがあつたらば、お前も抜いて斬つてしまえ」

内心はどうだか知らないが、父としては斯う命令するよりほかは無かつたのであろう。

長八は更に我が子にむかつて、探索たんさくの心あたり四、五カ所を云い聞かせると、長三郎

は委細いさいこころえて、父の前を退いた。そうして、直ぐに表へ出る支度をしていると、母は幾らかの小遣い銭を呉れて、その出ぎわに又ささやいた。

「お父さまはああ云っているけれども、なにしろ総領むすめなんだからね。おまえに取つても姉さんなのだから……」

長三郎は無言でうなずいて出たが、なにぶんにも困つた役目を云い付かつたと、彼は悲しく思つた。

姉を庇かばう母の心はよく判つているが、この場合、一刻も早く姉をさがし出して、なんとかその処分をしなければ、父の身分にも関かかわる、家名にも関わる。たとい母には恨まれても、姉を見逃がすようなことは出来ない。もし幸之助が一緒にいて、なにかの邪魔をするときは、父の指図通りにしなければならぬ。白い蝶の探索については、彼も一種の興味を持つていたが、今度の探索はなんの興味どころか、単に辛つらい、苦しい役目というに過ぎなかつた。

それでも彼は奮発して出た。勿論、どこという確かな目当てもないのであるが、さしあたりは父に教えられた心あたりの四、五カ所をたずねることにした。それは母方の縁者や、多年出入りをしている商あきんど人などの家で、あるいは青山、あるいは高輪たかなわ、更に本所深川

などであるから、いかに若い元気で無茶苦茶に駈けまわっても、それからそれへと尋ね歩くのは容易ではなかった。

しかも行く先きぎきで何の手がかりをも探り出し得ないので、彼はがっかりしてしまった。姉はどこへも立ち廻った形跡がないのである。

疲れた上に、日も暮れかかったので、長三郎はきょうの探索を本所で打ち切ることにした。本所の家は母方の叔母にあたるので、そこで夜食の馳走になって、六ツ半（午後七時）を過ぎた頃に出て来たが、本所の奥から音羽まで登るにはかなりの時間を費した。江戸市中の地理に明るくない彼は、正直に両国橋を渡って、神田川に沿って飯田橋に出て、更に江戸川の堤とてに沿うて大曲おおまがりから江戸川橋にさしかかったのは、もう五ツ（午後八時）を過ぎていた。

雨催いの空は低く垂れて、生なまあたたかい風が吹く。本所で借りて来た提灯をたよりに、暗い夜道を足早にたどって、今や橋の中ほどまで渡り越えたとき、長三郎は俄かに立ち停まった。自分のゆく先きに白い蝶が飛んでいるように見えたからである。はっと思つて再び見定めようとすると、その白い影はもう消え失せていた。

「心の迷いか」と、長三郎は独りで笑った。



蝶の影は彼の迷いであつたかも知れないが、さらに一つの黒い影が彼の眼のさきにあらわれた。水明かりに透かして視ると、それは確かに人の影で、音羽の方角からふらふらと迷つて来るのであつた。

長三郎は油断なく提灯をさし付けて窺うと、それは火の番の娘お冬で、さも疲れたように草履をひき摺りながら歩いて来た。

「お冬か」

長三郎は思わず声をかけると、お冬はこちらを屹きつと見たが、忽ちに身をひるがえして元来た方へ逃げ去ろうとした。その挙動が怪しいので、長三郎は直ぐに追いかけた。追いついてどうするという考えもなかつたが、自分を見て慌てて逃げようとする彼女の挙動が、いかにも胡乱うらんに思われたからであつた。

疲れているらしいお冬は遠く逃げ去るひまも無しに、追つて来る長三郎に帯ぎわをつかんで引き戻された。そのはずみに、彼女はよろめいて倒れた。

「なぜ逃げる。わたしを見て、なぜ逃げるのだ」と、長三郎は声を鋭くして訊いた。

お冬は黙っていた。

「お前はこれから何処へ行くのだ」

長三郎はかさねて詰問しながら提灯の火に照らして見ると、お冬は右の足に草履を穿はいて、左足は素足であつた。片眼の女、片足の草履、それが何かの因縁でもあるように、長三郎の注意をひいた。

「おまえは片足が跣はだし足だ。草履をどうした」

お冬は黙つていた。

先日、水引屋の職人と一緒に藤助の家をたずねた時にも、お冬は始終無言であつたが、今夜もやはり無言をつづけているので、長三郎はすこしく焦じれた。

「え、なぜ返事をしないのだ。おまえは何か悪いことでもしたのか」

長三郎はその腕をつかんで軽く揺り動かすと、お冬は地に坐つたままで男の手さきをしつかりと握つた。

前髪立ちとはいいいながら、長三郎も十五歳である。殊に今の人間とは違って、その時代の人はすべて早熟である。若い女に、自分の手を強く握られて、長三郎の頬はおのずと熱ほてるよう感じられた。

彼はその手を振り払いもせず、暫く躊躇していると、お冬はいよいよ摺り寄つてささやいた。

「若旦那……。あなたこそ何処へお出ででした」

今度は長三郎の方が黙ってしまった。

「あなたは誰かを探して歩いてるんじゃないやございませんか」

星をさされて、長三郎はなんだか薄気味悪くもなった。

この女はどうして自分の秘密の役目を知っているのでしょうか。もう一つには、今頃こんな取り乱したような姿をして、どうしてここらを徘徊しているのでしょうか。彼は謎のような女に手を握られたままで、やはり暫くは黙っていた。

一〇

お冬は長三郎の手を固く握ったままで、更にささやいた。

「あなたの探している人は見付かりましたか」

なんと答えようかと長三郎はまた躊躇したが、結局思い切って正直に云った。

「見付からない」

「教えてあげましょうか」

「おまえは知っているのか」

「知っています」

「ほんとうに知っているのか……。教えてくれ」と、長三郎は疑うように訊いた。

「あなたの探している人は……。御近所にかくれています」

「近所とは……。どこだ」

「佐藤さまのお屋敷に……」と、お冬は左右を見かえりながら声を低めた。

「佐藤……孫四郎殿か」と、長三郎は意外らしく訊き返した。「どうして知っている」

それにはお冬も答えないので、長三郎は摺り寄って又訊いた。

「そこには幸之助と……。まだほかにも隠れているのか」

自分の姉の名をあらわに云い出し兼ねて、長三郎は探るようこう訊くと、お冬は頭を

ふった。

「いいえ、黒沼のお婿さんだけです」

長三郎は失望した。勿論、幸之助の詮議も必要であるが、さしあたりは姉のゆくえを探しあてるのが自分の役目である。その姉は佐藤の屋敷にいないと聞いて、彼は折角の手がかりを失ったようにおもった。それでも再び念を押しした。

「黒沼幸之助だけは確かに佐藤の屋敷に忍んでいるな」

「はい」

長三郎は焦れて来たので、とうとう姉の名を口にした。

「わたしの姉のお北は一緒にいないのか」

「おあねえさんは御一緒じゃありません」

「姉の居どころをおまえは知らないか」

お冬は又だまってしまった。あくまでも焦らされているように思われて、年の若い長三郎は苛々した。

「これ、正直に教えてくれ。頼む」

「お頼みですか」

「頼む、頼む」と、長三郎は口早に云った。

「わたくしもお頼み申したいことがありますか……」と、お冬は自分の顔を男の頬へ摺り付けるようにして、訴えるようにささやいた。

もうこうなつては前後を省みる暇もないので、長三郎は素直に答えた。

「おまえの頼むこと……。なんでも肯いてやる。早く教えてくれ」

「では、一緒においでなさい」と、お冬は立ち上がった。

彼女はやはり男の手を掴んで放さなかった。

この上は彼女の心のままに引き摺られて行くのほかは無いので、長三郎も無言で歩み出した時、宵からの生なまあたたかい風が往来の砂をまいてどっと吹き付けた。その砂を顔に浴びて、男も女もあわてて両袖をおわ掩ったので、繋がっている手と手が自然に離れた。長三郎の持つている提灯の火もあやうく吹き消されそうになった。

その風のうちに、お冬はなんの音を聞いたのか、俄かにうしろを見返ったかと思うと、長三郎のそばを颯さつと離れて、橋を南へむかつて飛鳥のごとくに駈け去った。取り残された長三郎は呆気あっけに取られて、再びそれを追いつける気力もなく、唯ぼんやりと其のゆくえを眺めていると、やがて草履の音が北の方から近づいて、頬かむりをした男がうしろから彼に声をかけた。

「あなたはあの女とお知合いでございませうか」

相手が何者か判らないので、長三郎は突つ立ったまま睨んでいると、男は頬かむりの手拭を取つて丁寧えしやくに会釈した。

「わたくしは神田の三河町に居りまして、お上かみの御用を勤めている吉五郎という者でござい

います。失礼ながらあなたは……」

長三郎も黙っていられなくなつた。

「わたしは音羽の御賄屋敷にいる瓜生長三郎……」

「はあ、瓜生さんの御子息でございましたか」

丁度いい人に出逢つたと云うように、吉五郎は馴れなれしく摺り寄つて来た。

「あの女は音羽の火の番の娘じゃございませんか」

長三郎はうなずいた。

「御近所ですから、前から御存じなんでしょうな」と、吉五郎はまた訊いた。

「知っています」

「そこで、くどくおたずね申すようですが、今ここでどんなお話をなすつたんでしょう。いや、こんなことを申し上げてはたいへん失礼でございますが、これも御用とおぼしめて御勘弁をねがいます。実は先刻あの女を取り押さえて、少々取り調べて居ります処へ、思いもよらない邪魔がはいりまして……」

云いかけた時に、強い南風みなみが又もやどつと吹き寄せて来て、二人の顔をそむけさせたが、その風のなかで何を見付けたのか、吉五郎はあわててふた足三足かけ出した。一羽の白い

蝶が風に吹き揚げられたように、地を離れてひらひらと空を舞って行くのである。長三郎もそれを見つけて、思わずあつと声をあげた。

「若旦那。つかまえて下さい」

吉五郎はすぐに蝶を追った。長三郎も一緒に追った。しかも、あいにくに強い風が又吹き付けたので、蝶は橋の上から斜めに飛んで、川の上に吹きやられてしまった。

「水に落ちたかな」と、長三郎は提灯をかざしながら、残念そうに云った。

「そうでしょう。川の方へ吹き飛ばされちゃあ仕様がありません」と、吉五郎も残念そうに水の上を覗いていた。「しかし若旦那。あなたは何か御覧になりませんでしたか」

「なにを見たかと云うのだ」

「あの蝶々の飛んで行くときに、何か御覧になりませんでしたか」

「いや、別に……」

「そうでしたか」と、吉五郎は微笑みながらうなずいた。

その一刹那に、長三郎はふと心付いた。怪しい蝶はよそから飛んで来たのではなく、その地面から吹き揚げられたらしい。暗いなかで不意に起こったことであるから、もちろん確かには判らないが、地に落ちていた蝶が強い風のために空中へ吹き揚げられたのでは



あるまいか。生きた蝶か死んだ蝶か。あるいはお冬が怪しい蝶を袂にでも忍ばせていて、故意か偶然に落として行つたのではあるまいか。その疑いを解こうとして、彼は更に訊き返した。

「おまえは何か見たのか」

「いや、別に……」と、吉五郎は笑つていた。

自分の返事を鸚鵡返しにして、冷やかに笑つてゐるような岡つ引の態度を、長三郎は小面が憎いようにも思つた。彼は何をか見付けたに相違ない。そうして、意地わるく秘してゐるのである。秘されるほど聞きたがるのが人情であるのに、まして今の場合、長三郎はあくまでもその秘密を探り知りたいので、忌々しいのを堪えながらおとなしく訊いた。

「おまえは何か見たらしい。見たなら見たと云つて正直に教えてくれ。わたしもあの蝶々について詮議をしているのだから……」

「そうですか」と、吉五郎はすこし考えながら答えた。「折角ですが、それは申し上げられません。あなたも御覧になつたのなら格別、わたくしの口からは申されません。こう申したら、定めて意地のわるい奴だとおぼしめすかも知れませんが、御用を勤めている者はみんなそうです。そこで、あなたはどういうわけで、あの蝶々を御詮議なさるんです」

「別にどうと云うこともないが、このごろ世間で評判が高いから……」

「唯それだけの事でございますか」と、吉五郎は相手の顔色をうかがいながら云った。

「まだほかに、何か仔細があるのじやあございませんか」

「ほかに仔細はない」と、長三郎は強く云い切った。

「仔細がなければよろしいのですが……」と、吉五郎は又もや意味ありげに云った。「時におあねえ様はもうお屋敷へお帰りになりましたか」

長三郎はぎよつとした。さすがは商売だけに、岡つ引は早くも姉の家出を知っているのである。さてその返答をどうしたものかと、彼も即座そくざの思案に迷っていると、吉五郎は論ろんすように云った。

「若旦那。わたくしは大抵のことを知っています。蝶々のことも大抵は見当が付きました。やっぱりわたくしの鑑定通りでした。近いうちにきつと罫らちをあけてお目にかけます。おあねえ様の御安否もやがて判りましょう。御姉弟ごきょうだいのことですから、おあねえ様のゆくえをお探しなさるのはあなたの御料簡次第ですが、蝶々の一件はあなた方がお手出しをなさらずに、どうぞわたくし共にお任せください。素人しろうとがたに荒らされると、かえって仕事が出来なくなりますから……。お父さまとうにもよくそう仰しやって下さい」

こうなると、多年の功を積んだ岡つ引と、前髪のある若侍とは、まったく相撲にならないのは判り切っているので、長三郎も意地を張るわけには行かなくなった。

「おまえは姉のありかを知っているのか」

「それは存じません。しかし探索の糸を手繰たぐつて行けば、自然に判ることだと思いません。もし知れましたらば早速におしらせ申します。自分の手柄をするばかりが能じゃありません。お屋敷の御迷惑にならないようにきつと取り計らいますから、御安心ください。もうおいおいに夜が更ふけます。今晚はこれでお別れ申しましょう」

行きかけて、吉五郎はまた立ち戻つた。

「唯今も申した通りですから、あなた方は決して蝶々の一件におかかわり合いなさるな。悪くすると、あなた方のおからだに何かの間違いが無いとも限りませんから……」

嚇おどすように云い聞かせて立ち去るうしろ姿を、長三郎は無言で見送っていた。

吉五郎が最後の一言はあながちに嚇おどしばかりでは無い、現に黒沼伝兵衛は目白の寺門前で怪しい横死わうしを遂げたのである。それを思うと、長三郎も今更のように一種の不安を感じて、どこにどんな奴が自分を付け狙っているかも知れないと、俄かに警戒するような心持にもなった。そうして、風の音にも油断なく耳と眼とを働かせながら、暗い夜道を提灯に

照らして帰る途中、彼はいろいろに考えた。

今夜のことはすべて謎である。お冬の云うことも、吉五郎の云うことも、半分は判っているようで半分は判らない。お冬は自分をどこへ誘って行くつもりであったのか、吉五郎はなにを見付けたのか、長三郎にはよく判らないのである。彼は怪しい娘と岡つ引とに焦らされているようにも感じた。

予想以上に帰りが遅かったので、瓜生の父も母もやや心配していたが、無事に戻って来た我が子の顔を見て、まず安心した。長三郎はきょうの探索の結果を報告して、どこにも姉の立ち廻つたらしい形跡のないことを説明すると、父の顔色は陰くもつた。

「不孝者め。困つた奴だ。あしたは非番ひばんだから、おれも探しに出よう。まだほかにも心あたりはある」

長三郎はお冬に出逢つたことを報告すると、長八の眉はまた皺しわめられた。

「してみると、お冬という女はお北のゆくえを知っているのか。おれも最初から火の番のことが気にかかつていたのだが、やはり何かの係り合いがあると見えるな。それにしても黒沼幸之助が佐藤孫四郎殿の屋敷に忍んでいるとはいいいことを聞き出した。どういう訳があるか知らないが、本人をいったん隠まつた以上、ひと通りの掛け合いでは素直に本人を

渡すまい。存ぜぬ知らぬとシラを切るに相違ないから、なんとか手だてをめぐらして、無事に幸之助を受け取る工夫くふうをしなければなるまい。それまでは誰にも他言するなよ」

吉五郎に關する報告を聞いて、長八はまた云った。

「三河町の吉五郎の名はおれも聞いている。岡っ引仲間でもなかなかの腕利きだそうさ。それがもう大抵は見当を付けたと云う以上、蝶々の方はどうにか塚うちが明くのだろう。こうなると、蝶々はどうでもいい、一日も早くお北と幸之助をさがし出して、こつちの塚を明けなければならぬ」

父としてはこう云うのが当然であると、長三郎も思った。蝶の詮議などはしよせん一種の物好きに過ぎない。それよりも姉のゆくえ詮議が大事であると考えたので、彼は父とあしたの探索の打ち合わせをして寢床にはいった。しかも彼は眼が冴えて眠られなかった。どうでもいいとは思いつつも、やはり彼は蝶のことが気にかかってならない。お冬と白い蝶と、その二つを結び付けて、彼はなんとかしてその謎を解こうと試みたが、結局は無駄な努力に終つた。

長三郎が眠られないあいだに、おなじく眠らない人があつた。それは吉五郎の子分の留吉で、彼は寺のひと間に衾よぎをかぶつて、そら寝入りをしながら寺内の様子を窺っていた。

医者の診察によると、留吉の怪我は幸いに差したることも無かつた。しかし吉五郎は寺の納所なつしよにたのんで、あしたの朝は駕籠を迎いに遣すよこから、今夜だけはここへ寝かして置いてくれと云つた。寺では少しく迷惑らしいようであつたが、相手が相手であるから情なく断わるわけにも行かないので、結局承知して吉五郎を帰した。

さつきからよほどの時を費したので、今さら墓場の探索をするのも無駄だと諦めて、吉五郎はそのまま表へ出た。それから神田へ帰る途中、江戸川橋でお冬のすがたを認め、更に長三郎にも出逢つたことは、前に記しるした通りである。そこで吉五郎がどんな発見をしたかは、留吉はもちろん知らなかつたが、親分が自分ひとりをここに残して行つた料簡りようけんはよく判つていた。

「あの医者は手軽そうなことを云つたが、なかなかそうは行かねえらしい。腕も足もずきずきと骨が痛んで、自由に身動きもならねえ。あしたは駕籠に乗って骨つぎの医者へ行つて、よく診みて貰わなけりやあならねえ」

寺の納所なつしよたちへ聞こえよがしに、彼はこんなことを云つて、わざと苦しそうに顔をし

かめていた。

そこに寢床を敷いてもらって、彼は頭から衾よぎを引つかぶってしまったが、自分には大事の役目のあることを承知しているので、今夜は眠らない覚悟をきめて、しずかに夜の更ふけるのを待っていると、目白不動の四ツ（午後十時）の鐘を聞いて、寺内もひっそりと鎮まった。

留吉はこのあいだからこのあたりを徘徊して、附近の様子を探っていたので、この寺の相当に大きいことを知っていた。建物は古いが手入れもよく行き届いていて、寺内には住職のほかにも納所坊主が二人、小坊主が一人、若い寺男が一人、都合五人が住んでいる。寢床を敷きに来た小坊主に訊くと、住職の名は祐道ゆうどう、納所は善達と信念、寺男は弥七と云うのである。

「ほかの坊主はともかくも、和尚の面つらつきがどうも気に入らねえ」と、留吉は寝ながらに考えた。

外の風の音はまだ止まないで、枕もとの雨戸も時々揺れるように響く。その庭さきで何やら人の争うような物音がきこえた。猫や犬が狂っているのではない。確かに人と人が挑いどみ争っているのである。

留吉は寢床から這い出して、なおも聴き耳を立てていると、その人は息をはずませて争っている。さらに障子をそつとあけて、縁側まで這い出して雨戸越しに窺うと、外の人  
は二人であるらしく、一人は男、一人は女であることも、その息づかいで大かたは想像さ  
れた。かれらは得物えものを取つて鬨なぐつているのでなく、空手からての掴み合いであるらしかった。

夜ふけの寺の庭さきで、男と女が息を切つて掴み合い、むしり合っている。それだけで  
も唯事ではない。留吉は雨戸の隙間すきまから覗いてみようと思つたが、何分にも戸締まりが嚴  
重に出来ている上に、長い縁側の戸袋とぶくろは遠いところにあるので、そこまで這つて行つて  
雨戸を繰り明けるのは容易ではなかつた。よんどころなく雨戸の隙間に耳を押し付けて、  
一心に外の物音を聴き澄ましていると、その物音は吹き消されたように忽ち鎮まつて、風  
の音のほかには何んにも聞こえなくなつた。

留吉は不思議に思つた。なんだか気味が悪いようにも感じた。今まで聞こえていた物音  
は自分の空耳そらみみであつたのか、あれほどの格闘かくとうが俄かにひっそりと鎮まる筈がない。一  
方が倒れたならば、尚更その物音がきこえる筈であるのに、何事も無しに忽ち鎮まつてし  
まうのは可怪おかしい。しかも自分の耳にきこえたのは、風音でもなく、木の葉の摺れ合う音  
でもなく、たしかに人と人とが挑み合う音であつた。



「変だぞ」

暫く縁側に這い屈かがんで、留吉は外の様子を窺っていたが、怪しい物音は再び聞こえなかった。根負けがして寢床へ戻ったが、彼はいよいよ眼が冴えて眠られなかった。

どうで夜明かしと度胸を決めているのであるから、眠られぬのは平気であったが、今夜の出来事について彼はいろいろに考えさせられた。男は誰か、女は何者か、なんのわけで夜更けに庭さきで、掴み合っていたのか。自分もその物音を聞いたばかりで、その正体を見とどけないのであるから、物に馴れている留吉にも見けんとう当が付かなかった。

張り詰めている気もゆるんで、彼は明け方から思わずとうとうと眠った。再び眼をあくと、いつの間にか雨戸は開け放されて、縁さきには朝の光りが流れ込んでいた。手足のまだ痛むのを堪こらえながら、留吉は寢床の上に起き直ると、枕もとの煙草盆には新らしい火が入れてあった。自分の寝ているうちに、小坊主が覗きに來たものと見える。彼は自分の油断を後悔しながら、不自由の手で煙草を一服すった。

「寢首を搔かれねえのが仕合わせだった」と、彼は独りで苦にが笑わらいした。

寺では寢巻を貸してやろうと云ったのを断わって、彼はゆうべからごろ寝をしていたので、そのまま這い起きて羽織をかさねた。例の物音が気になるので、彼はそつと縁側へ出

てみると、庭さきはもう綺麗に掃いてあつて、そこで掴み合いのあつたらしい形跡は残されていなかった。それでも彼は庭下駄を突っかけて、おぼつか 覚束ない足どりで庭に降りた。

ゆうべの風はいつか吹きやんで、今朝はうららかに晴れていた。庭のまん中にある桜の大樹も、もうひと雨でほころびそうにあか 紅らんで、春をよるこぶ小鳥の声が賑やかに聞こえた。よく見ると、その木の下には古いこけ 苔を踏み荒らした足跡が残っている。怪しい物音は自分のそらみみ 空耳でなかつたことを確かめて、留吉は又もや独りで笑いながら、身をかが 屈めてそこらあたりを見まわしたが、別にこれぞという物も見いだされなかつた。

痛むからだを我慢して、さらに墓場の方へ行きかかる時、ふと見かえると住職の祐道がころも 法衣すがたで自分のうしろに突っ立っていたので、留吉はすこし慌てながら挨拶すると、祐道はその蒼ざめた顔に笑みを含みながら云つた。

「お痛み所はいかがですか」

「おかげさまで、よほど楽になりました」

「それは結構でござる。まあ、ご大切になさい。昨夜も申し上げた通り、わたしもかぜ 風邪で引き籠つて居りましたが、今朝はよんどころない法用で唯今から外出いたします。吉五郎どのが見えましたらば、宜しくお伝えください」

「行つてらつしやい」と、留吉も丁寧<sup>ていねい</sup>に会釈した。

「では、御免」

祐道はそのまま立ち去つた。そのうしろ姿が植え込みの八つ手の大きな葉かげに隠れるのを見送つているうちに、八つ手の葉が二、三枚新らしく折れているらしいのが留吉の眼についた。近寄つて見ると、下葉は果たして折れていた。しかも何者かが無理に搦んで引き折つたらしく見えた。おそらく昨夜の格闘の際に、一方の相手が何かのはずみに下葉を搦んだのであろう。そう思いながら更に見まわすと、その折れかかった下葉の裏に白い糸屑が引つかかっていた。早朝に掃除をした者も、さすがにそこまでは気がつかなかつたらしい。留吉はその糸屑をとつて、朝のひかりに透かしてみると、糸の長さは四、五寸で、俗に菅糸すがいとという極めて細いものであった。

女の住んでいない寺じちゆう中では、僧侶が針や鋏を持つことが無いとも云えない。その糸屑が庭さきに散つていたとて、さのみ怪しむにも足らないかも知れないが、留吉はゆうべの一件を思い合せて、この糸屑にも何かの仔細があるらしく疑われたので、あたりを窺いながらそつと自分の袂はいかいに忍ばせた。

庭さきに余り長く徘徊はいかいしていて、他の僧らに怪しまれては何かの邪魔であると思つた

ので、留吉は縁側に這いあがって、再び元の寢床の上に坐っていると、やがて小坊主が朝飯を運んで来て、きょうは起きられるかと訊いたので、どうにか起きられるようにはなつたが、まだ手足の自由が利かないから、迎いの駕籠の来るまでは斯うして置いてくれと、留吉は頼んだ。小坊主はこころよく承知して、どうぞごゆっくりと答えて去つた。

午ひるに近い頃に、吉五郎は迎いの駕籠を吊らせて来て、納所坊主や寺男に礼を云つて、留吉を受け取つて出た。出るときに、吉五郎は寺男の弥七に幾らかの銀かねをつつんでやつた。

「親分。不動さまの境けいだい内まで駕籠をやつてください」と、留吉は小声で云つた。

駕籠は音羽の大通りへ出ないで反対の方角にむかつて目白坂をのぼつた。不動の門前に駕籠をおろさせて、駕籠屋をそこに待たせて置いて、留吉は親分に扶たすけられながら門内にはいったが、人目を憚はばかる彼等は、客をよぶ掛茶屋をよそに見て、鐘撞堂の石垣のかけに立つた。

「どうだ、留。早速だが、なにか種は拳がったか」と、吉五郎は頬かむりの顔をすり寄せて訊いた。

「別に面白いこともありませんでしたが……。でも、一つ二つ……」

留吉は先ず夜なかの格闘の一件を話した。それから彼の系か屑を出してみせると、吉五郎

は一と目見て笑い出した。

「はは、これだ、これだ。実はこの菅糸をおれも見たよ」

「どこで見ました」

「江戸川橋の上で……。ゆうべおめえに別れてから、風の吹くなかを帰って行くと、橋の上で火の番の娘を見つけたんだ」

「お冬があんな所をうろついていましたか」

「一旦ここを逃げてから、どこをどう迂路うろついていたのか知らねえが、橋の上で若い侍と話していて、おれの足音を聞きつけると直ぐにまた逃げてしまった」

「その侍は何者です」

「その侍は御賄組の瓜生長三郎……。このごろ家出をしたお北という娘の弟だ。いや、それはまあ後のことあとにして、おれがその侍と話しているうちに、一つの白い蝶々がひらひらと舞いあがった」

「ふうむ。白い蝶々が又出ましたかえ」と、留吉も眼をみはった。

「おれの鑑かん定ていでは、お冬の袂から地面に一旦落ちたのを、強い風に吹きあげられて……。まあ、そう思うより仕方がねえ」と、吉五郎は説明した。「侍の持っている提灯の火で透

かして視ると、その蝶々には細い糸が付いている……。細くって、光っているのを見ると、これだ、この菅糸だ。途中で切れたと見えて、やっぱり七、八寸ぐらいしか付いていなかったが、おれの眼には確かに菅糸と見えただ」

「その蝶々はどうしました」

「つかまえようと思ううちに、風の吹きまわして川のなかへ落ちてしまったが、蝶々も生き物じゃあねえ、薄い紙か絹のような物で上手に拵こしらえただろうと思う。暗いなかで光るのは、羽はねに何かの葉が塗つてあるんだな。早く云えばお化けのような物だ」

この時代には、子供の玩具おもちゃに「お化け」と云うものがあつた。燐のたぐいを用いたもので、それを水に溶かして人家の板塀または土蔵の白壁などに幽霊や大入道のすがたを書いて置くと、昼ははつきりと見えないが、暗い夜にはその姿が浮いたように光って見えるのである。もちろん、子供の幼稚な悪戯いたずらに過ぎないので、それに驚かされる者は少ないのであるが、気の弱い娘子供などは、やはりこの「お化け」を恐れ嫌つた。怪しい蝶が闇夜に光るのは、それに類似の手段を用いたのであろうと、吉五郎はひそかに想像していたのであつた。

「そうかも知れませんか」と、留吉もうなずいた。「さもなけりやあ、寒い時節に蝶々の

飛び出す筈がありませんからね」

「そこで、その蝶々がどうして飛ぶか……。拵え物を飛ばせる以上、誰か糸を引く奴がなければならぬ。おれがだんだん調べてみると、その蝶々が飛び出すのは風の吹く晩に限っているらしい。そうになると、いよいよ怪しい。といって、小さい蝶々を飛ばせるには、どんな糸を使うのか、それとも何かの機からくり関仕掛けにでもなっているのか。おれは上野のからすだこ烏 凧 から考えて、多分この菅糸を使うだろうと鑑定していた。おめえも知っているだろう。花どきになると、上野じゃあ菅糸の凧を売っている。薄黒いから烏凧というのだ。あの凧は紙が薄い上に、糸が極ごくほそ細の菅糸だから風のない日でもよくあがる。今度の蝶々にも菅糸をつけて、風の吹く晩に飛ばせるだろう。そうして、暗い晩を狙ってやりやあ自分の姿はみえねえ、蝶々だけが光る……。まあ、こんな手妻てづまだろうと思っていた。ところが案の通り、ゆうべの蝶々には菅糸が付いていた。おめえも寺の庭で菅糸を拾った。万事が符合する以上は、もう間違いはあるめえ。蝶々の正体は大抵判つたと云うものだ」

「そうです、そうです」と、留吉は又うなずいた。「成程、親分の云う通り、お化けと烏凧で、手妻の種はすっかり判つた。ところで、それを使う奴は……」

「お冬という奴だろう」

「なぜそんな事をするんでしょう。唯の悪戯いたずらでもあるめえが……」

「唯のいたずらじゃあねえに決まっている。それにはお冬を使って、何かの仕事もくろ目論んでいる奴があるに相違ねえ。誰かがお冬の糸を引いて、お冬がまた蝶々の糸をひくと云うわけだから、順々に手繰たぐつて行かなけりやあ本家本元は判らねえ。それにしても、ここまですべき付けりやあ大抵の山は見えているよ」と、吉五郎は笑っていた。

「そうすると、お冬はゆうべ又あの寺へ舞い戻つて来たんでしょうか」と、留吉はまた訊いた。

「そうのようにも思われる。そうでねえようにも思われる。おれもそれを考えているんだが……」

「でも、その菅糸が落ちていたんですよ」

「この一件はお冬ばかりじゃあねえ。大勢の奴らが係り合っているらしいから、糸屑いとくずだけでお冬とも一途いちずに決められねえ」と、吉五郎はまだ考えていた。「だが、まあ、今の話はこれだけにしよう。来たついでと云つちやあ済まねえが、不動さまにお詣りをして別れようぜ」

二人は本堂の方へ足を向けた。



親分と子分は不動堂の門前で別れて、留吉を乗せた駕籠は神田へ歸つた。吉五郎は頬かむりをして音羽の大通りへ出ると、水引屋の市川屋の店さきに、子分の兼松が人待ち顔に腰をかけていた。彼は親分のすがたを見つけて、小走りに寄つて来た。

「もし、面白いことがありますよ」

「むむ、どんなことだ」

兼松は振り返つて小手招ぎをすると、店から職人の源蔵が出て来た。吉五郎に引き合わされて、彼は丁寧えしやくに会釈した。

「わたくしは市川屋の職人で源蔵と申します。なにぶんお見識り置きを……」

「わたしも今後よろしく願います。そこで、兼。この源蔵さんという人に何か手伝つて貰うことでもあるのかえ」と、吉五郎は訊いた。

「実はね」と、兼松は声をひくめた。「この源蔵がゆうべ変なことを見たと云うんです」「なにを見たね」

吉五郎は職人の方へ向き直ると、源蔵も小声で話し出した。

「実は昨晚、高田の四家町よつやまちまで参りまして、その帰り途に目白坂の下まで参りますと、寺の生垣いけがきの前に男と女が立ち話をして居りましたが、わたくしの提灯の火を見ると、二人ともに慌てて寺のなかへ隠れてしまいました。夜目遠目よめとおめで確かなことは申されませんが、男は火の番の藤助で、女はむすめのお冬のように思われたのでございます。お冬はともあれ、このあいだから行くえ知れずになつて居る藤助がこの辺にうろ付いていて、往来なかで娘と立ち話をしているのは何だか変だと思いましたが、その時はそれぎりにして帰つてまいりました。そこで、念のために今朝ほどお冬の家うちへ行つてみますと、お冬は留守でございました。もちろん、藤助のすがたも見えず、家はがら明きになつて居りました」

「それは宵のことかえ」

「左様でございます。まだ五ツ（午後八時）にはならない頃でございました」

「それから、もう一つのことも話してしまいねえ」と、兼松は催促した。

「へえ」と、源蔵はやや当惑らしい顔色をみせたが、やがて思い切つて又云い出した。

「わたくしももう五十で、年のせいでございましょうか、若い人たちのようにはどうも眠られません。昨晚も風の音に耳につきましておちおちと眠られずに居りますと、なんでも

夜なかの事でございました。表で頻りに犬の吠える声がきこえるのでございます」

「むむ」と、吉五郎もそのあとを催促するように相手の顔をみつめた。

「夜なかに犬の吠えるのは珍らしくもございせんが、あんまり烈しく啼なきますので、わたくしも何だか気味が悪くなりまして、そつと起きて店へ出まして、雨戸の節穴から覗いてみますと、表は真つ暗でなんにも見えませんでした。犬の吠えているのは隣りの店のまえで、その犬の声にまじつて人の声が聞こえるのでございます。低い声ですからよく判りませんが、ふたりで話しているらしいので……」

「男の声かえ、女の声かえ」

「どっちも男の声のようで……」

「その男が何を話していたえ」

「それがはつきりと判りませんでした。……ひとりかなぜ寺へ埋うめないのでと云つていたようでございました」

「その声に聞き覚えはなかつたかね」

「何分はつきりとは聞き取れませんで……」

「それから其の二人はどうしたね」

「やがて何処へか行つてしまつたようで、犬の声もだんだんに遠くなりました」

「どっちの方へ遠くなつたえ」

「橋の方へ……」

「もうほかに話してくれることは無いかね」

「へえ」

「いや、大きに御苦労。この後も何か氣のついたことがあつたら教えてくんねえ」

「かしこまりました」

源蔵はほつとしたように立ち去つた。それを見送つて、吉五郎は子分にささやいた。

「正直そんな奴だな」

「小博こはくち奕ぐらゐは打つでしようが、人間は正直者ですよ」と、兼松は答えた。「そこで、

親分。今の話の様子じゃあ、ゆうべ此の辺で人間の死骸を運んだ奴があるらしゆうござんすね」

「むむ。まんざら心当たりがねえでもねえ。おれもたつた今、留の野郎から聞いたんだが……。おい、耳を貸せ」

吉五郎は再びささやくと、兼松は顔をしかめながら幾たびかうなずいた。

「へえ、そんなことがあったんですか。夜なかに寺の庭さきで男と女がむしり合いをして……。じゃあ、その女が息を止められたんでしようね」

「まあ、そうだろうな」

「女は誰でしょう。お冬でしょうか」

「さあ、それが判らねえ。この一件にはお冬と、御賄屋敷を家出したお北という女と、佐藤の屋敷に隠れているお近という女と、都合三人の女が引つからんでいるらしいので、どれだかはつきりとは判らねえが、まずこの三人のうちだろう。みんな殺されそうな女だからな」

「それにしても、まあ誰でしょう」

「執拗しつこく訊くなよ。それを穿索するのがおめえ達の商売じゃあねえか」と、吉五郎は笑った。「だが、まあ、おれの鑑定じゃあお近という女だろうな。なにしろ自分が殺されそうになっても、ちつとも声を立てずに争っていたのを見ると、よつほどのしつかり者に相違ねえ。お北というのはどんな女か知らねえが、いくら武家の娘でも斯ういう時にはなんとか声を立てる筈だ。お冬もしつかり者らしいが、なんと云っても小娘だ。大の男を相手にして、いつまでも激しく争っていられそうもねえ。そうすると、まずお近だろうな」

「なるほど、そういう理窟になりますね。それで、これからどうしましょう」

「佐藤の屋敷へ踏み込むか、祐道という坊主を締め上げるか、それが一番早手廻しだが、なにぶん一方は旗本屋敷、一方は神社の係りだから、おれ達が迂闊うかつに手を入れるわけにも行かねえので困る。まあ、気長に手練たぐって行くよりほかはあるめえ、第一に突き留めなけりやあならねえのは、その死骸の始末だが、寺で殺して置きながら墓場へ埋めてしまわねえのは、後日ごにちの証拠になるのを恐れたのだろう。川へ流したか、それとも人の知らねえような所へ埋めてしまったか。源蔵の話じゃあ、二人の男が橋の方へ行つたらしいと云うから、ひよつとすると何かの重しでも付けて、江戸川の深いところへ沈めたかも知れねえ。日が経つて浮き上がったにしても、死骸がもう腐つてしまえば人相は判らねえからな」

「そうですね。殺した奴は誰でしょう」

「おればかり責めるなよ。おめえもちつと考えろ」と、吉五郎はまた笑った。「殺されそうな女も三人あるが、殺しそうな男も三人ある。火の番の藤助と、黒沼の婿の幸之助と……。もう一人は寺の住職……。まず三人のうちらしいな。いや、往来でいつまでも立ち話をしてるのは良くねえ。そこからで午飯でも食いながら相談するとしよう。留はあの様子じゃあ、まだ当分は思うように働かれめえ。おめえが名代みょうだいにひと肌ぬいでくれ。頼む

ぜ」

「ようがす」

二人は連れ立って、そこらの小料理屋へあがると、時刻はもう午を過ぎているので、狭い二階には相客もなかった。縁側に寝ころんでいた猫は人の影をみて早々に逃げて行った。「あんまり居ごころのいい家じやあねえな」と、兼松はつぶやいた。

「まあ仕方がねえ。こういう時には、繁昌しねえ家の方が都合がいいのだ」

親分も子分も少しは飲むので、取りあえず酒と肴をあつらえて猪口を取りかわした。

「今度の一件は留の受け持ちで、わっしは中途からの飛び入りだから、詳しいことが腹にはいつていねえんですが……」と、兼松は猪口を下に置いて云い出した。「いったい、佐藤の屋敷に忍んでいるお近という女は何者ですな」

「今はお近とっているそうだが、以前はお亀と違って、深川の羽織をしていたんだ」

「むむ。芸者あがりかえ」

「容貌きりようも好し、気前もいとか云うので、まず相当に売れているうちに、金田という千石取りの旗本の隠居に鼻尻ひしきにされて、とうとう受け出されて柳島の下屋敷しもへ乗り込むことになったのだ」と、吉五郎も猪口を置いて説明した。「それでまあ二年ほど無事に暮らし

ていたのだが、今から足かけ四年前の秋のことだ。十三夜の月見で、夜の更ふけるまで隠居と仲よく飲んでいた。……それまでは屋敷の者も知っているが、そのあとはどうしたのか判らねえ。夜が明けてみると、隠居は寢床のなかに死んでいた。酔って正体もなしに寝ているところを、剃かみそり刀のようなもので喉を突いたらしい。手箱のなかに入れてあつた三十両ほどの金がなくなっている。お亀のすがたは見えねえ」

「隠居を殺して逃げたのか。凄しみい女だな」

「いくら隠居でも、妾に殺されたと云うことが世間にきこえちやあ、屋敷の外聞にもかかわるから、表向きは急病頓死と披露して、それはまあ無事に済んだのだが、当主の身になると現在の親を殺されてそのままにやあ済まされねえ。そこで、八丁堀の旦那のところへ内々で頼んで来て、お亀のゆくえを穿索して貰もらいたいと云うのだ。おれ達も旦那方の内意をうけて当分はいろいろに手を廻してみたが、お亀のありかは判らねえ。なかなか慥りょう巧こうな女らしいから、素早く草鞋わらじは穿はいてしまつて、もう江戸の飯を食くつちやあいねえらしい」

「なんで隠居を殺したんだろう」

「隠居には随分可愛がられて、いう目が出ている身の上だから、三十両ぐらいの金が欲ほしさに、主殺しをする筈のねえのは判り切つている。三十両は行きがけの駄賃だちんに持つて行つ



ただけのことで、ほかに仔細があるに相違ねえ。下屋敷は小人数だから、どうもよく判らねえのだが、女中たちの話によると、なんでも五、六日前に隠居と妾とが喧嘩をした事があるそうだ。その時は隠居もかなり激しく怒った様子で、お亀も蒼い顔をしていたというから、その喧嘩がもとでこんな事になったらしいが、どんな喧嘩をしたのか誰も知らねえから見当が付かねえ。なにしろちつとも手がかりがねえので、おれ達ももう諦めてしまつた頃へ、この頃になつてふと聞き込んだのは、お亀によく肖た女を音羽辺で見かけた者があると云うのだ。そこで、留に云いつけて、この音羽から雑司ヶ谷の辺を探索させると、あいつもさすがに馬鹿じゃあねえ、それからそれへと手をのばして、とうとう其の佐藤の屋敷に忍んでいることを突き留めたのだが、さつきも云う通り、旗本屋敷に巢を食つていたので、迂闊に手入れをすることが出来ねえ。しかし斯うなりやあ生洲の魚だ。遅かれ早かれ、こつちの物よ」

吉五郎は冷えた猪口を飲みほして、自信があるように微笑んでいると、兼松もおなじく得意らしく笑つた。

「まったく斯うなりやあ生洲の魚だ。そのお亀……お近という奴は今まで何処に隠れていたんでしよう。初めから佐藤の屋敷に忍んでいたんでしようか」

「そうじゃあるめえ」と、吉五郎は頭かぶりをふった。「それなら足かけ四年も知れずにいる筈はねえ。女は確かに草鞋を穿いていたに相違ねえ。おれもよく調べて見なけりやあ判らねえが、佐藤という旗本はお近が深川にいる時からの馴染かも知れねえ。留の話によると、佐藤は三年ばかり長崎へお役に出ている、去年の秋に江戸へ帰って来ると、お近はそのあとから付いて来たと言うのだ。してみると、お近も長崎へ行っていて、佐藤と一緒に引き揚げて来たのだろう。おれ達が鶉の目鷹の目で騒いでも知れねえ筈よ、相手は遠い長崎の果てに飛んでいたのだ」

云いかけて、吉五郎は俄かに表へ耳をかたむけた。

「なんだか騒々しいようだぜ。火事かな」

兼松はすぐに立つて往来にむかった肱掛け窓をあけると、うららかな春の町を駈けてゆく人々のすがたが乱れて見おろされた。

「弥次馬が駈け出すようですね。なんだろう。ちよいと見て来ます」

云いすて兼松は階子はしごを降りて行つたが、やがて引り返して来て仔細ありげにささやいた。

「江戸川橋の下へ死骸が浮き上がったそうですよ」

「死骸が……」と、吉五郎も眼をひからせた。「女か」

「若い女だそうです。何でも十八、九の……」

「十八、九か」

「なにしろ直ぐに行つて来ましょう」

「むむ。おれも後から行く」

兼松を出してやつて、吉五郎は忙がしそうに手をたたくと、女中が階子はしごをあがつて来た。

「どうも遅くなりまして相済みません。御飯は唯今すぐに……」

「いや、飯の催促じゃあねえ」と、吉五郎は煙草入れを仕舞いながら云った。「姐さん。

そのの川へ死骸が浮いたそうだね」

「そうだそうで……」と、女中は声をひくめた。「わたくしは見に参りませんけれど、まだ若い娘さんだそうです」

「十八、九というじゃあねえか」

「ええ。なんでもここの人らしいという噂で……」

「ここの人だ……。お武家かえ、町の人かえ」

「お武家さんらしいとか申しますが……」

「そうかえ。わたしたちは少し急用が出来たから、酒も飯もいらねえ。直ぐに勘定をしてくんねえ」

「はい、はい」

女中が早々に降りて行つたあとで、吉五郎は一旦しまいかけた煙草入れを取り出して、また徐しずかに一服吸つた。

江戸川に発見された死骸は、十八、九の若い女で、武家らしい風俗である。瓜生の娘お北——それが直ぐに吉五郎の胸に浮はかんだ。

「おれの鑑定は外はずれたかな」

寺で殺されて川へ流された女——それはお近ではなかったのか。お北か、お近か、彼はまだ半信半疑であつた。

「こういうときには落ち着くに限る」

彼は更に二服目の煙草を吸つた。表を駈けてゆく足音はいよいよ騒さわがしくきこえた。

料理屋の勘定をすませて吉五郎は表へ出ると、江戸川の方角へむかつて見物の弥次馬が駈けてゆく。吉五郎は目立たぬように頬かむりをして、その弥次馬の群れにまぎれ込んで行くと、江戸川橋から桜木町の河岸ちようかしへかけて、大勢の人が押し合っていた。検視の役人がまだ出張しないので、死骸は岸の桜の下へ引き揚げたままで荒あらむしろ蕪わらを着せてあった。吉五郎はそつと眼をくぼると、人込みのなかに兼松のすがたが見いだされた。市川屋の源蔵もまじっていた。

「御賄屋敷の娘さんと云うじやありませんか」

「瓜生さんのお嬢さんだそうですよ」

「なんでも二、三日前から家出をしていたんだと云うことですがね」

「身投げでしょうか、殺されたんでしょうか」

口々に語り合っている弥次馬の噂を聴きながら、吉五郎はなおあたりに眼を配っていると、十三、四歳らしい武家の娘と、十八、九ぐらいの女中らしい女とが息を切つて駈け付けて来た。

「ちよつと御免ください」

諸人を押し分けて死骸のそばへ進み寄ると、あたりの人々は俄かに路を開いた。その様

子を見て、吉五郎はすぐに覺さとつた。ひとりには瓜生の妹娘で、ひとりには奉公人であろう。父や母は世間の手前、ここへ顔出しも出来ないの、娘と女中が取りあえず真偽を確かめに来たに相違ない。見物の人々もその顔を見識しつているので、直ぐに路を開いて通したのであろう。さてこれからどうなるかと窺うかがつてみると、女中は死骸しかいのそばに立っている自身番の男に会あひあつつた。

「この死骸をみせて貰うことは出来ませうか」

「はい、どうぞ……」と、男は氣の毒そうに云いながら、顔のあたりの蕪むしろを少しくまくりあげて見せた。

二人の女はひと目のぞいて、たがいに顔を見あわせたが、それぎり暫くは何も云わなかつた。やがて男に再び会釈して、二人は無言のまま立ち去ってしまった。

「家うちから云い付けられて来たんだろうが、さすがはお武家の女たちだな」

「ちつとも取り乱した様子を見せないぜ」

かれらのうしろ姿を見送つて、人々はささやいていた。吉五郎は猶もそこにたたずんで、検視の来るのを待つていたが、役人は容易に來なかつた。真昼の春の日を浴びて、人込みのなかに立っていて、彼は少し逆上のぼせて来たので、あとへさがって河岸端かしばたの茶店へはいる

と、兼松もつづいて葭簀よしずのうちへはいつて来た。

「死骸は瓜生さんの娘に相違ないそうですよ」と、彼は小声で云った。

「むむ。あの女たちの様子で判っている」と、吉五郎もうなずいた。「だが、おれの鑑定もまんざら外はずれたわけじゃあねえ。あの死骸は寺で殺されたんじゃあねえ。自身番の奴が筵をまくったときに、おれもそつと覗いてみたが、死骸の顔にも頸のまわりにも疵らしい痕はなんにも見えなかった。第一、人に殺されたような顔じゃあねえ」

「じゃあ、唯の身投げでしようか」

「まずそうだろうな。寺で殺された女はほかにある筈だ」と、云いかけて吉五郎は葭簀の外を覗いた。「おい。兼、あすこで源蔵と立ち話をしている中ちゆうげん間は、どこの屋敷の奴だか、そつと源蔵に訊きいてみる」

「あい、あい」

兼松は駈け出して行つたが、やがて又引つ返して来た。

「あれは佐藤の屋敷の中間で、鉄造というのだそうです」

「そうか。留とどがいていいんだが……」と、吉五郎は舌打ちした。「まあ、いい。おれが

直かに当たってみよう。おめえはここに残っていて、検視の来るまで見張っていてくれ」

吉五郎は茶店を出ると、かの中間はまだそこを立ち去らずに、あとからだんだんに集まって来る見物人の顔を、じろじろと眺めていた。そのそばへ摺り寄って、吉五郎は馴れなれしく声をかけた。

「おい、兄あにい、済まねえが、ちよいと顔を貸してくんねえか」

「おめえは誰だ」と、中間は睨むように相手の顔を見返った。

「おめえは三河町の留という野郎を識っているだろう」

「三河町の……留……」と、中間はその眼をいよいよ光らせた。「その留がどうしたんだ」

「留が少し怪我をしたので、おれが代りに来たんだ。野暮を云わねえで、そこまで一緒に来てくんねえ」

「むむ、そうか」

中間も相手の何者であるかを大抵推量したらしく、思いのほか素直に誘い出されたので、吉五郎は先きに立って彼を元の小料理屋へ連れ込むと、さつき余分の祝儀をやった効目ききめがあらわれて、女中はしきりに世辞を云いながら二人を二階へ案内した。

「おめえは三河町の吉五郎だろう。なんで俺をこんな所へ連れて来たんだ」と、中間の鉄



造はおちつかないような顔をして云った。

「まあ、待ちねえ。だんだんに話をする」

酒と肴を注文して、女中を遠ざけた後に、吉五郎は打ちくつろいで話し出した。

「このあいだ中から内の留ちゆうがいろいろおめえの御厄介ごやくわいになっているそうだが……」

「なに、別にどうと云うこともねえんだが……」と、鉄造はまだ油断しないように眼をひからせていた。

「川へ揚がった死骸は、御賄屋敷の瓜生さんの娘だろうね」

「むむ」

「どうして死んだんだね」

「おらあ知らねえ」

「知らねえかえ」と、吉五郎は考えていた。「それはまあ知らねえとして、ゆうべの夜なかにおめえは何処へ行つたえ」

鉄造は黙っていた。

「あの風の吹く夜なかに、犬に吠えられながら二人連れで何処へ行つたんだよ」と、吉五郎はかさねて訊いた。

「おらあそんな覚えはねえ」と、鉄造は声を尖らせた。

「それじゃあ人違いかな。お近さんの死骸を運んで行ったのは、おめえ達じゃあなかつたかな」

相手の顔色の変つたのを見て、吉五郎は畳みかけて云つた。

「おめえ達はふだんからお近さんの世話になつて、相当に小遣いも貰つていたんじゃあねえか。よんどころなく頼まれたとは云いながら、その死骸を捨てる役を引き受けちゃあ、あんまり後生ごしょうがよくあるめえぜ」

「なんと云われても、そんな覚えはねえよ」と、鉄造は再び声を尖らせた。

「そう喧嘩腰になつちやあいけねえ。おたがい仲よく一杯飲みながら話そうと思つていゝるんだ」

あたかも女中が膳を運んで来たので、話はしばらく途切れた。女中に酌をさせて一杯ずつ飲んだ後に、ふたりは再び差しむかいになつた。

「目白坂下の寺は、おめえの屋敷の菩提所ぼだいしよかえ」と、吉五郎は猪口ちよこを差しながら訊いた。

「そうじゃあねえ」

「それじゃあ、お近さんの識つていゝる寺かえ」

「おらあ知らねえ」

「何を云つても知らねえ知らねえじゃあ、あんまり愛嬌が無さ過ぎるな」と、吉五郎は笑つた。「もう少し色気のある返事をして貰おうじゃあねえか」

「色気があつても無くつても、知らねえことは知らねえと云うよりほかはねえ。木刀をさしていても、おれも屋敷の飯を食っている人間だ。むやみにおめえ達の調べは受けねえ」

素直にここまで出て来ながら、今さら喧嘩腰になつて気の強いことを云うのは、俄かに一種の恐怖を感じて来たに相違ない。それがうしろ暗い証拠であると、吉五郎は多年の経験で早くも覺つた。

「まったくおめえの云う通りだ。屋敷奉公のおめえ達をこんな所へ連れ込んで、むやみに調べるといふ訳じゃあねえ」と、吉五郎は諭すように云つた。「留吉はおれの子分だ。おめえもその留吉と心安くしている以上、おれともまんざらの他人という筋でもねえ。それだから、ここまで来て貰つて、おめえの知っているだけのことを……」

「その留吉だつて昨日きのうきよ様の顔なじみだ。別に心安いという仲じゃあねえ」

「どこまで行つても喧嘩腰だな」と、吉五郎はまた笑つた。「それじゃあもうなんにも訊くめえが、おれの方じゃあおめえを他人と思わねえから、唯ひと言云つて置くことがある。

おめえ、あの屋敷に長くいるのは為にならねえぜ」

「なぜだ」

「白魚河岸の吉田幸之助というのは、おめえの主人とは縁つづきで、ふだんから出入りをしてるうちに、お近さんと仲好くなつた。それが又、不思議な廻り合<sup>めぐ</sup>わせで、近所の御賄屋敷へ養子に来るようになった。女房になる筈のお勝という娘は病気で、直ぐには婚礼も出来ねえそのうちに、隣りの娘と出来合つてしまった。それがお近さんに知れたので、やきもち喧嘩で大騒ぎだ。まあ、それまではいいとしても、それが為<sup>ため</sup>に幸之助は身を隠す、お勝という娘は自害する、お北という娘は身を投げる、お近さんは殺される。これほどの騒動が<sup>しゅったい</sup>出<sup>い</sup>来<sup>き</sup>しちやあ、唯済むわけのものじゃあねえ。積もつてみても知れたことだ。お気の毒だが、おめえの主人も係り合<sup>あ</sup>いで、なにかの迷惑は逃<sup>のが</sup>れめえと思う。そんな屋敷に長居をすりやあ、おめえ達もどんな巻き添えを喰わねえとも限らねえ。まあそうじゃあねえか」

鉄造は息を呑むように黙つていた。

「そればかりじゃあねえ。このごろ世間を騒<sup>さわ</sup>がしている、白い蝶々の種もすっかり挙がつているんだ。火の番の娘のお冬という奴が、菅糸を付けて飛ばしているに相違ねえ」

「おめえはどうしてそんなことを云うんだ」と、鉄造はあわてたように訊き返した。

「そのくらの事を知らねえようじゃあ、上の御用かみは勤まらねえ」と、吉五郎はあざ笑った。「もう斯うなつたら仕方がねえ。方々に迷惑する人が出来るのだ。おめえも覚悟していてくれ」

「嚇おそかしちやあいけねえ。おれはなんにも知らねえと云うのに……」と、鉄造は少しく弱い音をふき出した。

「おれは別に覚悟するほどの悪いことをしやあしねえ」

「これだけ云つても、おめえに判らなけりやあ、もういいや。そんな野暮な話は止めにして、まあゆつくりと飲むとしようぜ」

吉五郎は手をたたいて酒の代りを頼んだ。肴もあつらえた。そうして、無言で酌をしてやると、鉄造もだまつて飲んだ。吉五郎も黙つて飲んだ。二人はややしばらく無言で猪口のやり取りをしていた。ただ時々吉五郎は睨むように相手の顔を見た。鉄造も偷ぬすむように相手の顔色を窺った。

云うまでもなく、これは一種の精神的拷問ごうもんである。こうして無言の時を移しているあいだに、うしろ暗い人間はだんだんに弱つて来て、果ては堪えられなくなるのである。元

来が凶太い人間は、更にそのあいだに度胸を据え直すという術すべもあるが、大抵の人間はこの無言の責め苦に堪え切れないで、結局は屈伏することになる。鉄造もこの拷問に堪えられなくなつて来たらしく、手酌でむやみに飲みはじめた。

相手が思う壺にはまつて来たらしいのを見て、吉五郎はいよいよ沈黙をつづけていると、鉄造も黙つて飲んでいた。代りの徳利が三、四本も列べられた。

「どういうものか、きようは酔わねえ」と、鉄造はひとり言のように云いながら、吉五郎の顔を見た。

吉五郎はじろりと見返つたが、やはり黙つていた。鉄造も黙つて又飲んでいたが、やがて再び口を切つた。

「おめえはもう飲まねえのか」

吉五郎は答えなかつた。鉄造も黙つて又飲んだが、やがて更に云い出した。

「おい、おれ一人で飲んでいちやあ、なんだか寂しくつていけねえ。おめえも飲まねえかよ」

吉五郎はやはり答えなかつた。鉄造も黙つて手酌で又飲んだが、徳利や猪口ちよこを持つ手が次第にふるえ出した。彼は訴えるように云つた。

「おい。なんとか返事をしてくれねえかよ。寂しくつていけねえ」

吉五郎は再びじろりと見返つたままで答えなかった。鉄造は彼自身も云う通り、きょうは全く酔わないのであろう、むしろ反対にその顔はいよいよ蒼ざめて来た。泣くように又訴えた。

「おい。おめえはなぜ黙っているんだよ」

「そりやあこつちで云うことだ」と、吉五郎は初めて口を切つた。「おめえはなぜ黙っているんだよ」

「黙つていやあしねえ。おめえが黙っているんだ」

「それじゃあ俺の訊くことを、なぜ云わねえ」と、吉五郎は鋭く睨み付けた。

「だって、なんにも知らねえんだ」と、鉄造は吃りながら云つた。

「きつと知らねえか。知らなけりやあ訊かねえまでのことだ。おれも黙っているから、おめえも黙っている」

「もう黙つちやあいられねえ」

「それじゃあ云うか」

「云うよ、云うよ」と、鉄造は悲鳴に近い声をあげた。

「嘘をつくなよ」

「嘘はつかねえ。みんな云うよ」

「まあ、待て」

吉五郎は立つて、階子はしごの下をちよつと覗いたが、引返して来て再び鉄造とむかい合つた。

「さあ、おれの方からは一々訊かねえ。おめえの知っているだけのことを残らず云つてしまえ」

初めの喧嘩腰とは打つてかわつて、鉄造はもろくも敵のまえに兜かぶとをぬいだ。それでも彼はまだ未練らしく云つた。

「おれがべらべらしやべつてしまった後で、おめえは俺をどうするんだ」

「どうもしねえ、助けてやるよ」

「助けてくれるか」

鉄造はほつとしたような顔をした。吉五郎は彼に勇気を付けるために、徳利を取つて酌をしてやった。



## 一四

姉のお北の死骸が江戸川に浮かびあがった時、弟の瓜生長三郎は向島の堤どてした下をあるいていた。

彼はきのうも姉のゆくえを尋ねあるいて、本所まで来たのであるが、日が暮れたので途中から帰った。そうして、親子相談の末、きょうも、長三郎は小松川から小梅、綾瀬、千住の方面に向かい、父の長八も非番であるので、これは山の手の方角に向かうことになった。今と違って、その時代の人々は親類縁者の義理をかかさず、それからそれへと遠縁の者までもふだんの交遊をしているので、こういう場合には心当たりがすこぶる多く、殊に交通不便の時代であるから、親類縁者を一巡さがし廻るだけでも容易でなかった。

長三郎はまず小松川と小梅の縁者をたずねると、どこにも姉のすがたは見えなかった。かえって先方では寝耳に水の家出沙汰におどろかされて、長三郎にむかつて前後の事情などを詳しく詮議くわした。それらのために案外に暇取って、小梅を出たのは、もう七ツ（午後四時）を過ぎた頃であった。

旧暦の二月なかばであるから、春の彼岸ひがんももう近づいて、寺の多い小梅のあたりは彼岸

参りの人を待つかのようになく賑わっていた。寺門前の花屋の店さきにも櫓しきみがたくさん積んであった。それを横眼に見ながら、長三郎は綾瀬村の方角をさして堤下を急いでゆくと、堤の細路を降りて来る一人の侍に出逢った。侍は長三郎に声をかけた。

「瓜生の御子息ではないか」

呼ばれて見かえると、それは鯛の御納屋の今井理右衛門であった。瓜生の家と今井の家とは直接の交際はなかったが、同じ御納屋の役人同士であるから、今井と白魚河岸の吉田とは無論に懇意であった。その吉田と御賄屋敷の黒沼とは親戚関係であるので、瓜生の家でも自然に吉田を識り、それから惹ひいて今井をも識るようになったのである。長三郎もその人を見て会釈すると、理右衛門は笑いながら訊いた。

「どこへ行かれる。御墓参かな」

「いえ。綾瀬村まで……親類かたへ参ります」

「それは御苦勞。わたしは墓参で白髯しらひげの辺まで行く。屋敷を遅く出たので、帰りは日が暮れるかも知れない。寺の遠いのは少し難儀だな……」と、理右衛門はまた笑った。

綾瀬へゆく人、白髯へゆく人、勿論おなじ方角であるので、二人は列ならんで歩き出した。

「ゆうべの空模様では雨になるかと思つたら、思いのほかのどかな日和ひよりになった。堤の

桜の咲くのももう直きだ」と、理右衛門は晴れた空を仰ぎながら云った。「して、綾瀬の親類へはなんの用で……。遊びに行くのかな」

「いえ」とは云つたが、長三郎は少し返事に困つた。

「もしや姉さんを尋ねているのではないかな」と、理右衛門は小声で訊いた。

理右衛門がどうしてそれを知っているかと、長三郎は一旦おどろいたが、彼が白魚河岸の吉田と懇意である以上、そこから幸之助や姉の家出一件を聞き知っているのであると察したので、長三郎は正直に答えた。

「実は少し心配のことがありますので……」

「むむ。その件については白魚河岸でも心配しているようだ」と、理右衛門はうなずいた。「きのうも私が日本橋をあるいていると、岡っ引の吉五郎が私を呼び留めて、吉田の家のことを訊いていたが、あいつも今度の一件についての何かの探索をしているらしい。どうか大事になつてくれなければいいが……。そこで余計なことを云うようだが、これから綾瀬まではなかなか遠い。わざわざ尋ねて行つても無駄かも知れないぞ」

「無駄でしょうか」と、長三郎は相手の顔をみあげた。

「春の日は長いと云つても、綾瀬まで往復しては、どうしても暗くなるだろう」

「暗くなるのは構いませんが、行っても無駄でしょうか」と、長三郎は念を押した。

「無駄らしいな」

「では、あなたは姉の居どころを御存じなのですか」

「いや、知らない。わたしは知らない」と、理右衛門は迷惑そうに答えた。「だが、こんな遠方へは来ていそうもない。燈台下もとくら暗しと世のたとえにも云う通り、尋ね物というのは案外手近にいるものだ」

その口ぶりが何かの秘密を知っているらしいので、長三郎の胸はおどった。彼はあまえるように理右衛門に訊いた。

「あなたは御存じなのでしよう。どうぞ教えてください。幸之助はともかくも、姉の居どころだけを教えて下さい。お願いします」

「いや、知らない。まったく知らない」と、理右衛門はいよいよ迷惑そうに云った。「わたしはただ燈台下暗しという世のたとえを云ったまでだ。ともかくもここまで踏み出して来たのだから、無駄と思つて綾瀬まで行つてみるのもいいかも知れない。綾瀬へはこれから真つ直ぐだ。わたしはこれから右へ切れるから、ここで別れるとしよう」

理右衛門は俄かに右へ切れて、たんぼみち田圃路を足早に立ち去った。

その逃げるような態度といい、さつきからの口ぶりといい、一種の疑念が長三郎の胸に湧いたので、彼も見えがくれに理右衛門のあとを尾けて行こうと思った。しかも直ぐに歩き出しては、相手に覚られる虞れがあるので、暫くやり過ぎしてから、の事にしようと思案して、立ち停まつて其処らを見まわすと、路ばたに小さい掛茶屋があつた。

花見の時節ももう近づいたので、ここらの農家の者が急拵えの店を作つたらしいが、まだ商売を始めているわけではなく、ほんの型ばかりの小屋になつてゐる。その小屋に隠れるつもりで長三郎は何ごころなく踏み込むと、そこに立てかけてある古い葎よしずのかげから人が現われた。

不意におどろかさされて長三郎は思わず立ちすくむと、人は若い女で、かのお冬であつた。時も時、場所も場所、ここでお冬に出逢つて、長三郎は又おどろかさされた。彼は無言で屹きつと睨んでゐると、お冬は無遠慮に摺り寄つて来た。その片眼は異様にかがやいてゐた。

「若旦那。又ここでお目にかかりました」

「どうしてこんな所に来ている」

「もう自分の家うちへも帰れませんかから、ゆうべから方々をうろ付いていました」

「お前はゆうべ、わたしを姉さんのところへ連れて行ってやると云つたが、本当か」

お冬はだまつた。

「嘘か」と、長三郎は詰るなじように云つた。

「連れて行くと云つたのは嘘ですけれど……。お姉さんの居る所は知っています」

「知っているなら教えてくれ」

お冬は男の顔を見つめながら黙っていた。

「おまえは当ても無しにこちらへ来たのか」と、長三郎は訊いた。

「もし自分のからだか危くなつたら向島へ行けと、お父とつさんに云い聞かされているので……」

……

「向島の……なんとという所へ行くのだ」

「五兵衛という植木屋うぢやの家です」

「そこに姉さんも幸之助もいるのか」

お冬は答えなかった。

「そうして、その五兵衛の家は知れたのか」

「こちらへは滅多に来たことが無いので、路に迷って四つ木の方へ行ってしまった、お午ひる頃にここまで引返して来ましたが、くたびれたのと眠いので、さつきから此の小屋へ

はいつて寝ていました」

「では、その家は見付からないのか」と、長三郎は失望したように云った。

「これからあなたと一緒に探しましょう」と、お冬はその野生を發揮したように、いよいよ無遠慮に男の手を把とつた。

こんな女に係り合っていて、理右衛門のすがたを見失つてはならないと思つたので、長三郎は把られた手を振り払つて小屋の外へ出ると、ひと筋道の田圃には侍のうしろ姿が遠く見えた。それを慕つて歩き出すと、田圃に沿うて小さい田川が流れている。その田川が右へ曲がつたところに狭い板を渡して、一軒の藁わら葺ぶきの家が見いだされた。周囲は田畑で、となりに遠い一軒家である。型ばかりのあらまがきい籬まがきを結いまわして、あき地もないほどにくさんの樹木が植え込んであるので、それが植木屋ではないかと長三郎は思つた。門かどには一本の大きい桃が紅あかく咲あいていた。

理右衛門はそこに立ち停まつて、一旦うしろを振り返つたが、やがて狭い板を渡つて内へはいつた。それを見とどけて、長三郎は足早にあるき出すと、お冬もあとから付いて来た。

「気をおつけなさい。あの侍はあなたを見たかも知れませんよ」と、彼女は小声で注意し

た。

長三郎はそんなことに頓とんちやく着していられなかった。彼は再びお冬をふり切って、一軒家を目ざして駈け出して、やがて門前へ行き着いて少しく躊躇した。理右衛門はともあれ、自分はこの家になんのゆかりも無いのであるから、案内も無しにつかつかと踏み込むわけには行かない。迂闊うかつに案内を求めたらば、相手にさとられて取り逃がす虞おそれが無いとも云えない。彼は桃の木の下に立って、どうしたものかと思案していると、内から五十前後の女が出て来て、若い侍を不安らしくじろじろと眺めていた。長三郎も黙っていると、やがて女は怪しむように声をかけた。

「あなたはどなたでございます」

なんと云つていいかと、長三郎はまた躊躇したが、思い切つて訊き返した。

「今この家へ武家がいっただろうな」

「いいえ」

「このあいだから若い男と女が来ているだろうな」

「いいえ」

「誰も来ていないか」



「そんな方はどなたもお出でになりません」と、女は素気なく答えた。

「隠すな。私はその人たちに用があつて、わざわざ音羽の方から尋ねて来たのだ」

この押し問答のうちに、入口にむかつた肘掛け窓をほそ目にあけて、竹格子のあいだから表を覗いていたらしい一人の男が、大小をさして、草履を突っかけて、門口かどぐちにその姿をあらわした。それが黒沼の幸之助であることを認めた時に、長三郎は尋ねる仇にめぐり逢つたように感じた。

「長三郎、貴公は何しに来た」と、幸之助は眼を峻けわしくして云つた。

「姉を探しに来ました」と、長三郎は悪びれずに答えた。

「姉はいない」

「きつと居ませんか」

「居ない。帰れ、帰れ」

「帰りません。姉を渡して下さい」

「姉はいないと云うのに……。強情ごうじょうな奴だな」

「ここにいなければ、どこにいるか教えてください」と、長三郎は一と足進み寄つて訊いた。

「貴様……。眼の色をかえてどうしようと言うのだ」

そういう幸之助の眼の色もかわっていた。強いて手向かいすれば斬ってしまえと、父からかねて云い付けられているので、長三郎は一寸も退かなかつた。彼は迫るように又訊いた。

「姉はここにいるか、さもなければ、あなたが何処へか隠してある筈です。教えて下さい」「知らない、知らない」と、幸之助は罵るように云つた。

双方の声がだんだんに高くなつたので、内から又ひとりの侍が出て来た。それは理右衛門であつた。

「喧嘩をしてはいけない。双方とも待て、待て」と、彼はうしろから声をかけた。

その声を聞くと、幸之助は俄かに向き直つた。

「さては今井氏、貴公がこの長三郎を案内して来たのだな」

「いや、違う、長三郎は勝手に来たのだ」

「いや、そうでない。貴公らが申し合わせて、この幸之助を罠に掛けようとするのだ。その手は喰わないぞ」

幸之助はもう亢奮して、誰彼れの見さかきも無くなつたらしい。誰を相手ということ

も無しに、腰の刀をすらりと抜き放した。

「これ何をするのだ」と、理右衛門は制した。「取り逆上のぼせてはいけない。まあ、鎮まれ、鎮まれ。どうも困った気がいだ」

「むむ、気がいだ」と、幸之助はいよいよ哮たけつた。「こうなれば誰でも相手だ、さあ、来い」

理右衛門を相手にするには、少しく距離が遠いので、彼はまず手近かの長三郎を相手にするつもりであつたらしい。突然向き直つて長三郎に斬つてかかった。長三郎はころえて身をかわしたが、それと同時に、きやつという女の悲鳴がきこえた。

二挺の早駕籠が宙を飛ばせて来て、この門かどぐち口に停まつた。

お冬は長三郎の身代りに斬られたのである。彼女は男のあとを追つて来て、門口に様子を窺つていたのであるが、幸之助との掛け合いがむずかしくなつて、相手が腰の物を抜き放したので、彼女も一種の不安を感じて男を庇うために進み入つた時に、逆上のぼせあがつた幸之助の刃やいばに触れたのであろう。長三郎を撃ち損じた切つさきに、彼女は左の頸筋を斬られて、男の足もとに倒れた。

それと見て、長三郎も刀をぬいて身構えする間もなく、理右衛門は駈けよつて、幸之助

をうしろから抱きすくめた。

「抜き合わせてはならぬ。待て、待て」と、彼は長三郎に声をかけた。

半狂乱の幸之助は哮り狂つて、抱かれています腕を振り放そうと燥つてるところへ、二人の男がはいつて来た。岡つ引の吉五郎と兼松である。

「今井の旦那様。それはわたくし共にお渡しを願います」と、吉五郎は十手を把り直しながら声をかけた。

「吉五郎か」と、理右衛門は猶も幸之助を抱きすくめながら耳に口をよせて云つた。「幸之助、覚悟しろ。もう逃げる道はないぞ。侍らしく観念しろ。判つたか」

侍らしくという言葉に責められたのか、十手を持った二人が眼のまえに立ち塞がっているのに気怏れがしたのか、もう逃がれる道はないと諦めたのか、さすがの幸之助も俄かにおとなしくなつて、持っている血刀をからりと投げ捨てて、理右衛門に抱かれたままで土の上に乗った。

「吉田の親たちに頼まれて、因果をふくめて腹を切らせようと思つて来たのだが、もう遅かった」と、理右衛門は嘆息しながら云つた。「こうなつては仕方がない。幸之助、尋常に曳かれて行つて、御法の通りになれ」

幸之助は疲れ切つたように、無言で頭こうべを垂れていると、長三郎は待ち兼ねたように訊いた。

「姉もここに居りますか」

「いや」と、理右衛門は頭かぶりをふつた。「さつきも云う通り、姉はここにいない。幸之助ばかりだ」

「もし、瓜生の若旦那」と、吉五郎は喙くちをいれた。「あなたのお姉さまは……死骸になつて江戸川から……」

「江戸川から……」と、長三郎は思わず叫んだ。

理右衛門も幸之助も思い思いの心持で、悲痛の溜め息を洩らした。それに無関心であるのは片眼の少女ばかりで、彼女は幸之助のひと太刀に若い命を断たれて、しかも満足そうに其処に横たわっていた。故意か偶然か、彼女の片手は長三郎の袴の裾を掴んでいた。

一五

それから四日の後、音羽の旗本佐藤孫四郎は町奉行所へ呼び出された。寺の住職祐道は

寺社奉行の名によって同じく呼び出された。祐道は出頭したが、孫四郎はその前夜に急病頓死という届け出があった。表向きは急病と云うのであるが、その死の自殺であることは後に判った。

お近という女の死骸も江戸川に浮きあがった。吉五郎の鑑定通り、寺内で殺された女はやはりこのお近であった。

中間の鉄造が吉五郎の罠にかかつて、自分の知っている限りの秘密を口走った結果、黒沼幸之助のかくれ家が露頭ろげんしたので、吉五郎は子分の兼松と共に、早駕籠を飛ばせて向島の堤下へ駆け付けたことは、前に記しるした通りである。幸之助ももう観念したとみえて、これも自分の知っている限りの秘密をいっさい申し立てた。

祐道もさすがは出家だけあって、この期ごに及んでは悪びれずにいっさいを自白した。その他のお近、お冬、お北らはみな死んでいるので、女の側の事情はよく判らない点もあったが、ともかくも幸之助、祐道らの口こうきょう供つを総合して判断を下だすと、この事件の真相はまずは斯こう認めるのほかは無かった。

お近は前名をお亀といって、むかしは深川に芸妓勤めをしていた女である。それが金田という旗本の隠居に受け出されて、柳島の下屋敷に入り込んで、当座は何事もなく暮らし

ていたのであるが、お近は深川にいる頃から音羽の旗本佐藤孫四郎とも馴染をかさねていた。佐藤は二十五、六の独身者で、お近の心はそちらになびいていたが、何分にも金田にくらべると佐藤は小身であり、且は道楽者で身しんしょう上も悪いので、金田と張り合うだけの力はなく、お近は心ならずも柳島の屋敷へ引き取られてしまったのである。しかも二人の縁は切れないで、お近は柳島へ行つた後も寺参りや神詣かみもうでにかこつけて、ひそかに佐藤と逢曳あひびきを続けていた。

その秘密を金田の隠居に発見されて、事が面倒になつて来たのと、一方の佐藤は長崎出役を命ぜられて西さいしやく国へ旅立つことになつたのとで、お近は遂に金田の隠居を殺害してその手箱から盗み出した三十両の金を路用に、佐藤のあとを追つて行つた。勿論、表向きは佐藤の屋敷へ入り込むことは出来ないで、長崎の町はずれに隠まわれて外妾のように暮らしているうちに、三年の月日はいつか過ぎて、佐藤は江戸へ帰ることになつた。帰府の道中も同道しては人目ひとめに立つので、お近は一と足おくれて帰つて来て、そつと音羽の屋敷に忍び込んだ。

一種の治外法権ちがいほうけんともいふべき旗本屋敷に潜伏して、無事に月日を送っていれば、容易に町方まちかたの眼にも触れなかつたのであるが、お近は江戸へ帰ると、間もなく更に新らしい

恋人を見つけ出した。それは白魚河岸の吉田の次男幸之助である。吉田と佐藤とは母方の縁を引いている関係から双方が親しく交際していたので、お近も自然に幸之助と親しくなつて、佐藤の眼をぬすんで新らしい恋人と逢曳きするようになったが、男は女よりも八歳の年下であるので、若い恋人に対するお近の愛情は猛火のように燃えあがつた。彼女は男を逃がさない手段として、自分の秘密を幸之助に打ち明けて、万一変心するときは隠居殺しの共謀者としてお前を抱いてゆくと嚇した。こんにちと違つて、この時代には斯ういう威嚇が案外に有効であつたのである。たとい自分の無実が証明されるとしても、こんな女のかかり合いで奉行所の審問しんもんを受けたなどと云うことが世間に暴露ばくろすれば、長い一生を暗黒に葬らなければならぬ。年の若い幸之助は飛んだ者にかかり合つたのを悔みながら、お近の威嚇を恐れてともかくもその意に従つていた。

そのうちに黒沼伝兵衛の横死事件が起こつた。かねて許嫁いいなずけのような関係になつていたので、幸之助は黒沼のむすめお勝の婿と定められて、音羽の御賄屋敷へ来ることになつた。お近は恋人が近所へ来たのを喜んで、火の番の藤助の家をその逢曳きの場所と定めて幸之助をよび出していた。一方にはお近があり、一方にはまだ祝言こそしないがお勝という正式の妻もありながら、意思の弱い幸之助はさらに隣家の瓜生の娘お北と新らしい関係



を結ぶようになったので、一人の男をめぐる女三人の關係が甚だ複雑になった。しよせん無事には済むまいとは知りながら、幸之助も今更どうすることも出来なかつた。

ここで住職祐道に就いて語らなければならぬ。彼は実はお近と同じ腹の兄であつた。

祐道が長男で、その次に女ひとり、男ひとり、お近は末子の四人兄きょうだい妹であつたが、幼年のころに両親に死に別れて、皆それぞれ艱苦かんくを嘗なめた。なかの男と女は早く死んで、祐道とお近だけが残つた。祐道は幼い頃から深川の或る寺の小僧となつて、一心に修行を積んだ末に、この音羽でも相当に由緒ある寺の住職となつたのであるが、妹のお近は深川の芸妓に売られて、いわゆる泥水を飲む商売となつた。しかも運命は不思議なもので、この寺の近所に住む佐藤孫四郎とお近とが一種の悪因縁を結ぶことになつて、お近は主殺しの大罪を犯したのである。

祐道は妹の罪を悔み嘆いて、彼女が再び江戸へ歸るのを待ち受けて、いさぎよく自首するように説き聞かせたが、この世に未練の多いお近は泣いて拒こぼんだ。いつそ召連れ訴えをしようかとも思つたが、幼い時から共に苦勞をして来た妹が自分の眼のまえに泣いている姿を見ると、祐道のこころもさすがに弱くなつた。み仏に對して済まぬ事とは万々知りながら、彼は罪ある妹をそのまま見逃みのがして置くことにしたが、心は絶えずその呵責かしゃくに苦

しめられていると、妹はさらに第二、第三の罪をかきねた。

寺社奉行の訊問に対して、祐道の申し立てたところによると、去年の秋以来、暗夜に白い蝶を飛ばしたのはお近の仕業しわざであると云うのである。お近はなぜそんな怪しいことを企てたか。何分にも死人に口無しで、単に祐道の片口かたぐちに拠よるのほかは無いのであるが、彼は左のごとく陳述した。

「妹は長崎に居ります間に、唐人屋敷なんきんの南京人から或る秘密を伝えられたそうで、暗夜に白い蝶を飛ばして千人の眼をおどろかせれば、いかなる心願しんがんも成就じょうじゆすると云うのでござります。われわれの仏道から見ますれば、もとより一種の邪法に相違ござりませぬが、妹は深くそれを信仰しまして、江戸へ帰りましたから其の邪法を行なつて居りました。その心願はおのが過去の罪を人に覚られず、黒沼幸之助と末長く添くい遂げらるるよう、併あわせてその邪魔になる佐藤孫四郎の命を縮めるよう……詰つまりは恋に眼が眩くらんで、白蝶の邪法を行なうことになつたのでござります。佐藤にも罪はありますが、多年の馴染なじみといい、殊に長崎以来、自分を隠かくまつてくれた義理もありますに、新らしい恋人の為にその命を縮めようと企てるなど、まことに如夜叉にょやしやのたとえを其の儘でござります。しかし自分は女の身でありますから、暗夜に蝶を飛ばすなどと云うことは思うようにも参りませんので、

火の番の藤助に金銭をあたえまして、風の吹く夜に蝶を飛ばせていたのでござります。藤助は火の番の役がありますので、夜中そこらを徘徊して居りましても、誰も怪しむ者もござりません。藤助にはお冬という片眼の娘がありまして、これが生まれ付き素ばしい人間でありますので、蝶を飛ばす役はお冬が勤め、父の藤助はその後見こうけんを致して居ったようござります。その蝶は……秘伝と申して誰にも洩らしませんが、何か唐渡りからの薄い絹のような物で作りまして、それに一種の薬を塗つてありますので、暗いなかでも白く光るのでござります。音羽の近辺ばかりでは、人に覺られる虞おそれがありますので、時々には他の土地へも参つたようござりました。右の次第で、その蝶に毒があろうとは思われません。それを見て病気に罹かかつたなどと申しますのは、驚きの余りに発熱でも致したのでござりますまいか。それとも、その塗り薬に何かの毒でも混じてありましたか、それはわたくしも存じません。又お近が火の番の藤助とどうして心安くなりましたか。それもわたくしは存じません。佐藤の屋敷も以前は勝手不如意ふによいでござりましたが、長崎出役以来、よほど内福になつたとか申すことござります」

黒沼伝兵衛は何者に殺されたか、わが寺門前の出来事ながら自分は一向に知らないと祐道は云つた。しかし大かたは藤助親子の仕業しわざで、何かの毒薬を塗つた針のような物で刺さ

れたのであろうと彼は説明した。いずれにしても、自分の寺内の墓地を根城ねじろにして、世間をさわがすような事を繰り返すのは甚だ迷惑であるので、祐道はお近らに對して幾たびか意見を加えたが、彼等は一向に肯きかなかつた。そのうちに、白い蝶の噂がいよいよ高くなつて、町方からも探索の手が廻つたらしいので、祐道の心はますます苦しめられた。お近と幸之助が藤助の家から帰る途中で、町方らしい者に追われて危く逃のがれたなどという噂を聴くたびに、彼も毒針で胸を刺されるように感じた。

町方に追われて以来、氣の弱い幸之助は自分の屋敷へ帰られなくなって、佐藤の屋敷に身を隠すことになつたが、それを機会にお近はさらに一策を案出して、自分の恋がたきのお北を誘い出した。その使を頼まれたのは例の藤助で、彼は幸之助が佐藤の屋敷に忍んでいることをお北に告げて、本人もあなたに一度逢いたいと云っているから是非来てくれと巧みに欺いて連れ出したのである。連れ出されてお北はうかうかと佐藤の屋敷へ入り込むと、待ち受けていたお近はさらに彼女を奥の古土蔵のうちへ案内して、そこに押し籠めてしまった。自分の手もとに監禁して置けば、お北と幸之助の逢う瀬は絶えると思つたからである。

こうした悪業あくぎょうがそれからそれへと続くので、祐道ももう決心した。彼は妹が自分の

寺へ来たのを捕えて、おまえのような悪魔はしよせん救うべき道はないから、どうでも自首して出ると嚴重に云い渡した。もし飽くまでも不得心ならば、たいしゃく帝あしゆら釈けんぞが阿修羅の眷族をほろぼしたと同じ意味で、兄が手ずから成敗するからそう思えと、怒りの眼に涙をうかべて云い聞かせた。その決心の色が凄まじいので、お近も一旦は得心して、あしたは兄に連れられて奉行所へ自首して出ると答えた。

それでもまだ不安であるので、祐道は妹にむかつて、その覚悟が決まった以上はふたたび佐藤の屋敷へ帰るな、今夜はこの寺へ泊まって行けと命令すると、お近は承知して泊まったが、果たして夜なかにそつと抜け出そうとしたので、大かたそんな事であろうと内々警戒していた祐道は、すぐに追いかけて庭さきで取り押さえようとした。たがいに世間を憚るので、なんにも口を利かなかつたが、その無言の争いのうちに兄はいよいよ決心のほぞをかためて、阿修羅をほろぼす帝釈となった。兄は両手で妹の喉を絞めた。

それを窺っていたのは、藤助であった。彼は吉五郎らに追われて、墓場の奥に逃げ込んだが、留吉が途中で倒れた為に長追いをしないと見て、そつと庫裏くらへまわって、寺男に縄を解かせた。しかも迂闊うかつに表へ出るのは危険であるので、今夜は寺内に泊めて貰うことにした。自分ばかりでなく、手先も今夜ここに泊まることになったと云うので、彼は一種の

不安を感じて、夜なかに庭さきへ様子を窺いに来ると、あたかもお近が最期の場所へ行き合わせた。

住職に対する同情か、或いはこれを枷かせにして今後の飲み代しろをいたぶるつもりか、彼は死骸の始末を自分に任せてくれと云つて、佐藤の屋敷から中間の鉄造を呼んで来た。お近の死骸は風の吹く真夜中に運び出されて、江戸川に沈められた。藤助は黒沼伝兵衛の横死以来、わが家に住むことの危険をさとつて、ゆくえ不明と見せかけて、実は佐藤の屋敷に身をひそめていたのである。

祐道の陳述はこれで終つた。次の問題はお北がどうして入水しゆすいしたかと云うことである。果たして自殺か、あるいは他殺か、いずれにしても、黒沼幸之助が唯一の関係者として嚴重に吟味されたが、幸之助もそれに就いては何事も知らないと言いつつた。ただ、お近が殺される日の夕刻、お北は夕飯を運んで来た女中の隙をみて、土蔵をぬけ出したことだけは知っていると申し立てた。

さらに探索すると、市川屋の職人源蔵も最初は隠していたが、その後の申し立てによると、お北は佐藤の屋敷をぬけ出したものの、直ぐに我が家へも帰られず、途中でうろうろしている時、あたかも彼の源蔵に出逢つて、隣家のお勝が自害のことを聞いたと云う。そ

れに因つて推察すると、お北はおのれの罪を悔いたか、或いはしよせん無事に済まぬと覺悟して、其処らをさまよい歩いた後、夜に入るを待つて入水したのであろう。地理の關係とは云いながら、恋のかたきのお近もお北も、その死骸を同じ流れに浮かべたのは、何かの因縁であるかとも思われた。

向島の植木屋五兵衛は、親の代から佐藤と吉田の屋敷に出入りの職人である。この頃は町方の手が廻つたらしいので、白蝶の一件は暫く中止するように幸之助は注意したが、中途で止めては心願しんがんが破れると云つてお近は承知しないばかりか、却つて幸之助に迫つて、お冬の警戒を命じた。寺門前で藤助を救つた覆面の曲者は幸之助であつた。しかも氣の弱い彼は、いつまでもお近に脅迫されて、こんな仕事にかかり合つてゐるに堪えられなくなつたので、その夜のうちに音羽を立ち去つて、夜ふけに白魚河岸の実家の門かどを叩くと、父の幸右衛門は一切の事情を聞いて、この上はこの屋敷に一と晩も泊めることはならぬ、おれにも考えがあるから、ともかくも向島の五兵衛の家うちへ行つていろと指図した。その指図通りに向島へゆくと、あくる日の夕方に今井理右衛門が来た。つづいて瓜生長三郎が来た。岡つ引の吉五郎と兼松が来た。お冬の死と共に、幸之助の運命もここに定まつたのである。

佐藤孫四郎がなぜ自滅したか、この謎は遂に解けなかったが、それに就いて、幸之助はこんなことを洩らした。

「お近はわたくしに向かつて、佐藤は長崎にいるあいだにいろいろの悪いことをしている。それをわたしは皆んな知っているから、わたしがどんな我が儘をしても、佐藤は何んとも云うことが出来ない筈だと申したことがございます」

佐藤は長崎に出役中、役向きのことに就いて何かの不正事件があつたらしい。貧乏旗本の彼が内福になつたと云うのも、その間の消息を語っている。お近はその秘密を掴んでいるので、佐藤の屋敷内では思うがままに振舞っていたらしい。今度の事件に関連して、その不正が発覚はっかくするのを恐れて、佐藤は自滅したのではないかと察せられた。

火の番の藤助は再び行くえ不明となつた。彼を召捕つたならば、事件の真相が更に明瞭になるだろうと、吉五郎らもさまさまに手をまわして探索したが、遂になんの手がかりも無かつた。それから三月ほどの後に、八王子の山のなかで彼に似たような縊死者を発見したが、死体はもう腐爛しているので、その人相もはつきりとは判らなかつた。八王子は藤助の故郷であるが、どこへも尋ねて行つたという噂はきこえなかつた。あるいは何かの係り合いになるのを嫌つて、どこでも口を閉じていたのかも知れない。



「この事件の探索に主として働いた岡っ引の吉五郎は、わたしが『半七捕物帳』でしばしば紹介した彼<sup>か</sup>の半七老人の養父である。



# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（六）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年12月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：おのしげひこ

2000年2月10日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

## 白蝶怪

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>